

龍

エフゲーニイ シュヴァルツ 作

能美 武功 訳

城田 俊 監修

登場人物

龍

ランスロット

シャルルマーニュ - - 古文書係員

エルザ - - 彼の娘

町長

ヘンリー - - 彼の息子

猫

ろば

織工 -

織工 二

帽子職人

楽器職人

鍛冶屋

エルザの友人 -

エルザの友人 二

エルザの友人 三

歩哨

男の市民 -

男の市民 二

女の市民 -

女の市民 二

子供

牢番

従僕、見張り、住民達

第一幕

(広々とした快適な台所(兼食堂)。清潔。奥に炉がある。石造りの床 光っている。炉の前 肘掛け椅子に猫まどろむ。)

ランスロット (登場、見直し、呼ぶ) たのもう、ご主人殿、奥様殿、誰かおられぬか。たのもう。誰もいないのか。空っぽ。門は開けっぱなし。戸には鍵がかけてないし、窓も閉めてない。なんて運がいいんだ。この僕がまっとうな人間

で。さもなきや、手はむずむず、目はきよるきよる、手あたり次第に金目の物をもつてすたころと。ところで今はそれどころじゃないや。草臥れて。(坐る) 待つて居よう。おい、

猫君。君の飼い主達はもう帰って来るんだろう。な。君、黙つてるの。

猫 黙っています。

ランスロット あ？ 何故だい。

猫 暖かくて快適な時には、まどろんで黙っているのがいちばん賢いんです。

ランスロット (なるほど。) ところで、君の飼い主達は何処にいるんだい。

猫 外出中です。これが実にありがたい。

ランスロット 飼い主が嫌いなのかい。

猫 とんでもない。この毛皮の毛の一本一本、足の爪、口髭の先まで、あの人達のことを愛していますよ。でも悲しいことが起こって。心から休めるのは、あの人達がいない時だけなんです。

ランスロット なるほど。すると不幸が彼らを襲っている。それはどんな。え。君、黙ってるの。

猫 黙っています。

ランスロット 何故。

猫 暖かくて快適な時には、まどろんで黙っているのが一番賢いんです。不愉快な未来のことをあれこれ思うより。ミャー

ランスロット 猫君、驚いた話だね。台所はこんなに快適だ。暖炉だって良い火があかあかと。僕は信じたくないね。此の居心地のよい広々とした家に不幸が襲ってきているなんて。猫君。何が起こっているんだ。答えてくれよ。なあ。さあ。

猫 眠らせてください。旅のお方。

ランスロット 聴いてくれ。猫君。君は僕のことを知らないんだ。僕は身の軽い男でね。綿毛のようなもんさ。何処へでも吹き飛ばされて行くんだ。そして事件に巻き込まれる。これが僕の癖さ。御陰で軽傷が十九回、重傷が五回、それに重体になったことが三度もある。しかしまあこの様に生きている。それと言つのも、僕が綿毛の様に軽いばかりではなくってね、ろばの様に頑固だからなんだ。ねえ、猫君、何が起こっているんだい。ひょっとしたら君の飼い主を救う事だって出

来るかもしれないぜ。僕にはそういうことだつてあるのさ。さあ。君の名前は何ていうんだい。

猫 タマ子ちゃん。

ランスロット ええつ。雄だと思つて居た。

猫 雄なんです。でも人間てひどく不注意ですからね、時には。私の飼い主は今でも驚いているんです、私が未だに子供を生まないんで。どうしたんだい、タマ子ちゃん。こうです。かわいそうですよ、人間て。あ、これ以上私は何も言いません。

ランスロット これだけは教えてくれ。誰なんだい、君の飼い主つてのは。

猫 古文書係員シャルルマーニュとその一人娘、可愛い可愛いエルザです。

ランスロット ふたりのうちどちらになんだ、不幸は。

猫 ああ。エルザにです。という事は、私達みんなに。

ランスロット どんな不幸なんだ。さあ。

猫 ミャー。もう四百年も前になります。この町に龍が住み着いて。

ランスロット 龍。こりゃあいいい。

猫 それが重い年貢をとりたてるんです。それに毎年一人、娘を人身御供に。自分で選んだ娘を。こちらはウンモスーもミャーもなく捧げ奉るんです。龍は自分の洞窟に連れて行って、それで娘はお終い。死んじゃうんだそうです。気味悪くて、気味悪くて。フルルル。あっちへ行け、あっちへ行け。フーフー。

ランスロット あれ、誰に言っているの。

猫 龍にですよ。今年は私達のエルザが選ばれたんです。

いやなとかげ、いもり、爬虫類奴が。フーフー。

ランスロット 頭は何個だい。

猫 三個です。

ランスロット かなりなものだな。足は。

猫 四本。

ランスロット まあ普通か。爪は。

猫 一本の足に五本ずつ。爪と言ってもまるで鹿の角ですよ。

ランスロット ほほう。それで鋭いんだろうな。

猫 ナイフと同じです。

ランスロット そうだろう。ところで火を吐くかい？

猫 ええ。

ランスロット 本物の？

猫 森が燃えますから。

ランスロット ははあ。鱗は？ 鱗で覆われているんだろう？

猫 ええ。

ランスロット きつと頑丈なもんだらうな。

猫 そりゃもう。

ランスロット で どのくらい。

猫 ダイヤモンドでも切れないくらい。

ランスロット なるほど。分かった。身長は？

猫 教会の長さ。

ランスロット これではつきりした。有り難う、猫君。

猫 龍と闘ってくださいさるんですね。

ランスロット 考えておこう。

猫 お願いです。闘いに彼を引つ張りだして下さい。勿論龍が勝つてあなたは死ぬでしょう。でも想像する事は出来ませんから。あなたが死ぬその瞬間まで、ひよっとしたら、万に一つ、まさかとは思いますが、あるいは奇跡が起こって、貴方があいつをやっつけて仕舞うんではないかと。暖炉の前でうたた寝をしながらね。

ランスロット 有り難う。猫君。

猫 立つてください。

ランスロット どうしたんだい。

猫 お帰ります。飼い主の。

ランスロット ああ、僕が気に入る事が出来る女の人だったら。ああ、気に入ります様に。それだと随分助かるんだが。

(窓の外を見る) 気に入った。猫君、素晴らしい娘さんじゃないか。ええつ？ 微笑んでいるぞ。全く落ち着きはらっている。父親だって嬉しそうだ。何だ、僕を騙したのか。

猫 いいえ。此の話で一番悲しいところなんです。あの人達が微笑んで居ると言う点が。シツ。お帰りなさい。さあ晩御飯に致しましょう。(まるくなる)

(エルザとシャルルマーニュ登場)

ランスロット 今日。ご主人様、お嬢様。

シャルルマーニュ 今日。旅のお方。

ランスロット この貴方のお家が私を大層歓迎してくれまして。門は開いていまして、台所にも良い火が赤々と。で、招待も受けませんのにあがりこみ・・・いや失礼の段お許し下さい。

シャルルマーニュ いえいえ、失礼などと。家の戸は、皆様方何方様にも開いておりますので。

エルザ どうぞお坐りになって。帽子を。戸の所に掛けておきますわ。すぐ食事の支度を致します。どうかございませんか。

ランスロット いや、別に。

エルザ 私にはちよっと……私にお驚きになって？

ランスロット いやいや……なんでもありません。

シャルルマーニュ どうぞお掛けください。旅のお方。私はよそのお方が好きで……きつと、この町から一步も出ず、此処でばかり暮らしてきたからでしょうな。何方のお方？

ランスロット 南から参りました。

シャルルマーニュ さぞ御苦労がございましたでしょうな。みちで。

ランスロット ええ、あり難くないほどありました。

エルザ お疲れでしょう。どうぞ本当にお掛け下さい。お立ちの儘では辛いですわ。

ランスロット 有り難う。

シャルルマーニュ ここではゆつくりとお休みなれます。なにしろ静かな町ですから。事件などあったことはありませんし、起きるはずがないのです。

ランスロット あつたことがないですって？

シャルルマーニュ 一度も。尤も先週強い風が吹きまして、ある家で屋根が吹っ飛びそうになりましたが、まあそんな大事件とも言えんでしょう。これなぞ。

エルザ 夕食の用意が出来ましたわ。どうぞ。あら、どう

かなすって？

ランスロット 失礼ですが、その……今おっしゃいましたね、ここは静かな町だと。

エルザ ええ、言いましたけど……

ランスロット それで、どうなんです、龍は？

シャルルマーニュ ああ、あれですか……でも私達はあまりなれっこになってしまつて。なにしろ四百年もここに住んで居るんですから。

ランスロット でも……その。噂では、貴方の娘さんが……

エルザ あら、旅のお方。

ランスロット ランスロットと言います。

エルザ ランスロット様、お許し下さい、こんな事を申し上げて。でもお願いですわ、この事はもう口になさらないで戴きたいのです。

ランスロット 何故です。

エルザ だつてどうしようもないんですもの。

ランスロット こりゃ驚いた。

シャルルマーニュ そうです。実際どうしようもないんです。今二人で森へ行った所です。よく話し合いました。詳しく考えてみました。明日龍が娘を連れて行ったら、その後私も死ぬのです。

エルザ お父様、そんなこと口にはいけませんわ。

シャルルマーニュ いや、それだけの事さ。それでお願いします。

ランスロット 失礼ですが、もう一つ質問させて下さい。

一体今までに、龍と闘おうとした人は居ないのですか？

シャルルマーニュ この二百年はありません。それ以前はよく闘ったものです。しかし龍は強くて。みんな殺されてしまいました。なにしろ戦略あり、戦術あり、です。油断をみすまして突然襲いかかるんですな。空から石を投げつけ、真っ直ぐ下に突撃。馬の頭めがけて火を吹きかけるのです。かわいそうな馬はすっかり意気沮喪する。其処を狙って爪で騎士をひとつき。こういった具合でついには誰も龍に挑戦する者は居なくなつたのです。

ランスロット 町全体で龍にかかつて行ったことは？

シャルルマーニュ あります。

ランスロット で？

シャルルマーニュ 町の郊外を焼き払い、人口の半分は毒の息を吹き掛けられて気違いになりました。なかなかやりますよ、この龍は。

エルザ バターをどうぞ。

ランスロット ああ、有り難つ。力を付けて置かなければ。そうすると・・・いや根ほり葉ほり聞いて失礼。すると今では龍と闘う者は誰も居ないのですね。龍は凶々しくなつて来たわけだ。

シャルルマーニュ いえいえ。とても親切で。

ランスロット 親切？

シャルルマーニュ そうです。いつか此の町でコレラが流行つた時など、町の医者頼みで、湖に火を吹きかけ沸騰させてくれました。町の人々はその水を飲んだのでコレラに罹らないですんだのです。

ランスロット それは最近のことですか？

シャルルマーニュ いいえ、八十二年前のことです。でも、その恩をいまだに私達は忘れていないのです。

ランスロット ほう、それで、他にもあるんですか、親切な事が。

シャルルマーニュ ジブシーを追い払ってくれました。

ランスロット ジブシー？ いい人達ではありませんか。

シャルルマーニュ なんて恐ろしい事を。なるほど私は今までジブシーを一人だつて見たことはありません。しかし学校で習いましたよ。恐ろしい人達だつて事は。

ランスロット でも、何故？

シャルルマーニュ 生まれつき、血統ですな。無宿者なんです、彼らは。国家組織の破壊者ですよ。そうでなかつたら何処かに定住しているはずでしょう？ あちこちぶらぶらかないで。歌を聴いてごらんさい、彼らの。女々しくつて、やけっぱちではないですか。子供は盗むし、何処にでも入り込むし。今では此の町には一人もいませんよ。でも百年前だと髪の毛の黒い人は誰でも証明する義務があつたのです。自分にはジブシーの血が流れていないと。

ランスロット 誰がそんな話をしたのです？

シャルルマーニュ 龍です。なにしろ龍が住みついた最初の頃、随分ジブシー達は龍に挑戦しましたからなあ。

ランスロット 名誉ある人々だ。不倒不屈の精神だ。

シャルルマーニュ めっそもない。そんな事をおっしゃつては。

ランスロット 何を食べるんですか、この龍は？

シャルルマーニュ 一箇月に、牛千頭、羊二千頭、鶏五千羽、塩三十キ口。町で賄うんです。夏と秋にはこれにサラダが加わります。野菜畑十枚分のアスパラガスとカリフラワーの。

ランスロット 終いには貴方方の食べるものがなくなりま
すよ。

シャルルマーニュ なんてことをおっしゃいますか。不平は
ありません、私達は。それに、他に方法がありますか。ま
あ、あれが居てくれる限り、他の龍は近寄りませんからね。

ランスロット 僕の考えでは、他の龍なんてずっと前に死
んで居ますよ。

シャルルマーニュ ひよつとしてまだ居たら？ 他の龍を
追い払う一番良い方法、それは自分用のを一匹飼って置くこ
とです。この話はもうこれぐらいにしましょう。もっと何か
面白い話を話しましょうよ。

ランスロット いいでしょう。苦情帳って御存知ですか？

エルザ いいえ。

ランスロット お教えしましょう。ここから歩いて五年ぐ
らいかかる所に、山の中に、大きな洞窟があります。この洞
窟の中に帳面があるのです。もう半分まで書き込まれていま
す。誰もそれに触る人はいないのですが、一頁一頁と書き込
みが増えていきます。それも毎日です。誰が書くのでしょうか？

世界です。山が、草が、石が、木が、川が、人がする事を見
ています。悪い事をした人、苦勞しても報われない人、みん
な見ています。そして、枝から枝へ、水の雫から水の雫へ、
雲から雲へ、その山の洞窟まで、人々の苦情を伝えるのです。

そして苦情帳は大きくなっていきます。もしもこの世にこの
苦情帳がなかったら木の枝は憂いの為に萎れるでしょう。
水は悲しみの為に苦くなるでしょう。では誰の為にこの帳面
は書きこまれるか。僕の為にです。

エルザ 貴方の為ですって？

ランスロット ええ、僕とその他僕の仲間達の為にです。

我々は注意深い、身の軽い者たちです。この様な帳面がある
ことを噂に聞き、我々で捜しあてたのです。これを読んで
からはもう我々には休む時がありません。ああ、なんていう
苦情でしょう。この苦情には応えずにおくわけにはいきませ
ん。我々は出向いて行くのです。

エルザ それで？

ランスロット 他人事に介入するのです。助けねばならな
い人を助け、亡ぼさねばならない人を亡ぼすのです。お助け
しましょう。

エルザ どうやって？

シャルルマーニュ どうやって私共を助けるとおっしゃる？

猫 ミャウー。

ランスロット 三度、僕は命も危ぶまれる程の傷を受けま
した。みんな僕が無理やり助けた人にやられたのです。で
も、でも僕はやる。貴方方が頼まなくても。僕は龍に戦を挑
むのだ。ねえ、エルザ。

エルザ 駄目、厭よ。龍は貴方を殺すわ。私の人生の最後
の日は穢されて仕舞うわ。

猫 ミャウー。

ランスロット 僕は龍に挑戦するぞ。

(口笛、雑音、吠え声、唸り声、始まる。次第に大きくなる。ガラスが震える。窓の外が赤くなる。)

猫 噂をすれば影。

(吠え声、口笛、急に止む。扉に大きなノック。)

シャルルマーニユ どうぞ。

(着飾った従者登場。)

従者 龍様のおでまし。

シャルルマーニユ ようこそお出で下さいました。

(従者、広々と扉を開ける。間。初老のがっちりした年より若く見える薄色の髪の男が、軍隊式の歩き方で登場。頭はざんぎりにしてある。顔いっぱい微笑を浮かべている。態度に粗暴な所はあるが、全体に何かしら気持ちの良さがある。少し耳が遠い。)

男 今日、諸君。ああ、エルザ、どうじゃな。いつも可愛い。客がある様だな。誰じゃ。

シャルルマーニユ よその人です。旅の人で。

男 あ？ 報告は大きな声で、明瞭に。軍隊式に。

シャルルマーニユ よその人です。

男 ジブシーではないのか。

シャルルマーニユ とんでもない。とても良い人です。

男 あ？

シャルルマーニユ い、い、ひ、と、で、す。

男 よろしい。よそのお人。何故こちらを見ぬ。何故扉にへばりついて居るのじゃ。

ランスロット 龍が入って来るのを待ち受けているのです。

男 は、は。わしじゃよ。龍は。

ランスロット 貴方が？ 龍には三つの頭、爪、それに恐ろしく大きいと聞きましたか？

龍 今日、今日は平服。無礼講で来たのじゃ。

シャルルマーニユ 龍様は永いこと人間に混じって生活して来られたので屢々人に姿を変えられ、この様にお客に来られるのです。

龍 そうだ。わしは真の友だ。なあシャルルマーニユ。お

前達すべてにとつてわしは友達以上だ。お前達の子孫の友達でもあるんだからな。いや、それだけではない。わしはお前達の父親、祖父、曾祖父、の友達だった。そうそう、覚えておる。お前の曾曾祖父がだ、短いパンツを履いて遊び廻っていたもんだ。何だ、この涙は。つい出てしまった。は、は。旅のお方、眼を円くされておるな。こんな事は思いもかけん

だつたらうからの。は、は。エルザ！

エルザ はい、龍様。

龍 お手。

(エルザ手を龍に出す。)

龍 可愛い。悪戯っ子じゃ、お前は。何と柔らかいお手々じゃ。顔を上げて。笑って。よしよし。どうした、旅のお方。あ？

ランスロット 眺めているのだ。

龍 えらい。良い答えだ。眺めていなさい。ごたごたは御免だ、此処では。なあ、旅のお方。軍隊式じゃ。おいちに、

おいちに。この儘行こう。どうぞ召し上げられ。

ランスロット 満腹で。いや有り難う。

龍 さあ、さあ、どうぞ。此処へは何しに来られた。

ランスロット 仕事で。

龍 あ？

ランスロット 仕事で。

龍 何の。さあ。あ？ ひょっとしてお手伝い出来るかも知れん。何しに來られた？

ランスロット お前を殺す為だ。

龍 聞こえん！

エルザ あら、違つわ。冗談ですわ。さあもう一度しましよつか、お手を？ 龍様？

龍 一体これはなんじや！

ランスロット 私はお前に挑戦する。聞こえたか、龍！

(龍、黙る。赤紫色になる。)

ランスロット 私はお前に挑戦する。これが三度目だ。聞こえたか。

(耳を聳する恐ろしい三種の唸り声。唸り声の大きさにも拘わらず、そして壁が揺れる程でもあるのに、何かしら音楽的な響きがその中にある。人間的な音は全くない。龍が拳を握り、足を踏みならす時に出る音である。)

龍(突然唸りを止めて、静かに)馬鹿な。あ？ 何故黙つて居る？ 怖いんだろう？

ランスロット いや。

龍 いや？

ランスロット いや。

龍 分かった。(肩を軽く動かす。突然変化がある。龍の肩に新しい頭が現れる。古い頭は跡方なく消える。真面目な、控え目の、広い額、長い顔、白髪の男がランスロットの前に

立つ。)

猫 驚かないで、ランスロット。三つの顔の内ですよ。氣にいったのに取り替えるんです。

龍(顔と一緒に声も変わる。大きくない、事務的な声。)
お名前はランスロットでしたな。

ランスロット そうだ。

龍 遍歴の騎士ランスロット、かの有名な。あの子孫ですか。

ランスロット 遠い親戚だ。あれは。

龍 挑戦は受けましよう。遍歴の騎士ならジブシーと同じです。

ランスロット そう簡単にはいかんぞ。

龍 私も随分殺したものです。八百九人の騎士、名前不明の九百五人、一人の酔っぱらい、二人の氣違い、二人の女、8これは人身御供に選んだ娘の母親と叔母、それに十二歳の男の子、その娘の弟でした。そればかりではありません。六個師団の軍隊に、暴動群五、です。まあ坐つて下さい。

ランスロット(坐る。)
(有り難う。)

龍 煙草は？ おやりになる。ああ、どうぞ、どうぞ、御遠慮なく。

ランスロット では失礼。(パイプを出し、ゆっくりと煙草を詰める。)

龍 想像がお着きでしょうつか、私がどんな日に生まれたか。

ランスロット さぞ験(げん)の悪い日だったでしょう。

龍 恐ろしい戦いの日でした。あのアツチラが敗北した日です。お分かりでしょう、その日にはどれほど多くの将兵が

死んだか。地面は地で真つ赤。木々の葉は夜半にかけて褐色に変わりました。夜明けになると巨大な真つ黒い茸——これを「吊い茸」と人は呼んだのですが——それが木の下一面に生えましてね、その後から這い出たんですよ、私は。戦争から生まれた戦争の息子。私はまあ戦争そのものです。死んだフン族の血が私の血管には流れています。それは冷たい血です。だから戦場でも私は冷たい、冷静です。正確無比なんです。

(正確無比の言葉で、龍、少し手を動かす。パチンと音がして、龍の人指し指からリボン状の火が出る。ランスロットの詰めたパイプに火をつける。)

ランスロット 有り難う。(美味そうに吸う。)

龍 貴方は私に反対していらっしやる。即ち貴方は戦争反対ですね。

ランスロット なんてことを。僕は戦っているんだ。年中。龍 貴方は此処ではよそ者です。私達は昔からの知り合いです。町中貴方のことを恐ろしそうに見、死ねば大喜びです。名誉のない非業の死が貴方を待っています。これは分かっているんですね。

ランスロット いや。

龍 どうやら今まで通り、決意は堅いようですね。

ランスロット 今までよりもだ。

龍 これはあつぱれな挑戦者です。

ランスロット 有り難う。

龍 本気で戦うことにしましょう。

ランスロット 結構。

龍 つまり、その、すぐ殺すという事です。今、此処で。ランスロット 僕に武器がないのに！

龍 武装する時間が与えられる、とても思っていましたか。いえいえ。今申し上げた様に、私は本気で戦います。すぐ攻撃しましょう、今。．．．エルザ、ほつきを持って来て。

エルザ ほつき？

龍 この人を令、灰にしますから、後で掃き出して下さい。

ランスロット 君は僕が怖いのか。

龍 「恐れ」とは何か、私は知りません。

ランスロット 何故それなら急ぐのだ。明日まで期限をくれたまえ。武器を捜してくる。その後であいまえよう。

龍 何の為にでしょう。

ランスロット 町の人は思うじゃないか、君がおじけづいたと。

龍 何も分かる訳はありません。この人達も黙っているでしょう。貴方は此処で死ぬのです。勇敢に、静かに、名誉なしに。(手を上げる。)

シャルルマーニュ 止めて下さい。

龍 何ですか。

シャルルマーニュ 今は殺せません。

龍 何ですって？

シャルルマーニュ お願いです。怒らないで下さい。心からの貴方の僕(しもべ)です。でも古文書係員の立場から．．．

龍 その立場からするとどうだって言っんですか？

シャルルマーニュ 昔の書類があります。三百八十二年前に署名なされた。この書類は未だ廃棄されてはいません。ご

覧下さい。私は抗議しているではありません。ただ思い出して戴きたいと。そこにはちゃんと「龍」と署名が・・・

龍 それで？

シャルルマーニユ これは私の娘です。無理はないでしょう、少しでも長生きして貰いたいと願うのは。親として当然の事を願っている・・・

龍 要点を言いなさい。要点を。

シャルルマーニユ どうなつても構わん。私は抗議します。

今は殺せません。宣誓をして龍様は署名していらつしやいます。「挑戦者は戦いの日まで身の安全を保証する。戦いの日は龍様でなく、挑戦者が決定する。全市を上げて挑戦者の味方にならねばならぬ。またそれによっては決して懲罰は受けない。」と。

龍 何時書かれたのですか。その書類は。

シャルルマーニユ 三百八十二年前です。

龍 幼稚で、多感な、無邪気な青二才だったので。

シャルルマーニユ でも廃棄されていません。

龍 それが何です。

シャルルマーニユ しかし書類という物は・・・

龍 書類はもう沢山。私達は大人です。

シャルルマーニユ でも龍様ご自身の署名が・・・書類を取ってまいりましょう。

龍 そこ動くな。

シャルルマーニユ 娘を助けよう、というお方が現れたのです。子供への愛情、それはしようのないことでしょう。当然のことです。それに客に対する持てなし、これも大切な事

じゃありませんか。何故そんなに恐ろしい顔で睨むのです。(手で顔を覆つ。)

エルザ お父様、お父様。

シャルルマーニユ 私は抗議します。

龍 分かった。今からこの家全体を焼き払う事にします。

ランスロット 全世界に分かるぞ、お前が卑怯者だという事か。

龍 どうやって。

(猫、一跳びに窓の外へ出る。遠くから囁す。)

猫 皆、皆、皆に言っちゃおう。いやーらしい、いーもーりー。

(龍、再び唸る。唸り声は以前と同様に力強いが、今回はその中に、明らかに嘔(しわが)れた切れぎれの咳が聞こえる。)

龍 (急に唸るのを止めて。)分かった。明日戦いましょう！

う。お申し越し通り。

(急に去る。今度も扉の外に、唸り、シューシュー言う音が聞こえる。壁は震え、ランプが点滅する。唸り声、遠ざかる。)

シャルルマーニユ 行つてしまった。なんて事をしたんだらう。ああ、なんてことを。わがままなおいぼれだ、私ほ。でもどうしようもなかった。エルザ、私の事を怒っているかい？

エルザ いいえ、何を仰います、お父様。

シャルルマーニユ 私は疲れた。失礼する。横になつて来る。いやいや、一人で行ける。お客様のお相手をしてな。よくお持てなしして。あんなに親切にして下さつたんじゃ。じゃ、失礼するよ。(去る。間。)

エルザ 何故こんな事をお始めになつたの？ いえ、非難しているんじゃないの。でも、これまでとはとてもすつきりしてて、申し分なかつたんですもの。若くして死ぬつてそんなに怖い事じゃないわ。第一、年をとらなくてすむでしょう？

ランスロット なんて事を言つんだ。考えてもご覧。木だつて伐り倒される時には溜め息をつくんだよ。

エルザ でも私、残念じゃないわ。

ランスロット お父様は？

エルザ 死にたいつて思つた丁度その時に死ぬんですもの。結局幸せなんじゃないかしら。

ランスロット 友達と別れるのは？

エルザ 辛くは無いわ。だつて私じゃなかつたら、あの人達の中から選ばれるんですもの。

ランスロット 許嫁の人は？

エルザ どうして分かつたの、私に許嫁があるつて？

ランスロット 勸です。で、許嫁の人は？

エルザ ヘンリーを慰める為に、自分の秘書に任命したのよ、龍は。

ランスロット ああ、そういう訳か。で、勿論別れるのもう辛くないつて言うんだ。それでこの町は？ 生まれたこの町に別れるのは辛くない？

エルザ だつて、その町の為に死ぬんですもの。

ランスロット 町の方じゃ、平静に君の死を受け入れるの？

エルザ いいえ！ 日曜日に死ぬでしょう？ すると火曜日まで町中喪に服してくれるの。丸三日間誰もお肉を食べないのよ。お茶の時間にはビスケットが出されるの。「かわい

そうな娘さん」つていう名前の。私の追悼の為なの。

ランスロット それだけ。

エルザ それ以上何が出来るの？

ランスロット 龍を殺すんだ。

エルザ 出来ないわ。そんな事。

ランスロット 龍が君の魂を抜き去り、血に毒を入れ、目も霞ませて見えなくしたんだ。僕が元通りにしてやる。

エルザ そんな事やめて下さい。それに本当にそうだったら、私死んだ方がいいんじゃないかしら。

(猫、走り登場。)

猫 知り合いの猫八匹、四十八匹の子猫に頼んで町中と言いつらして貰いました。これから始まる決闘について。ミヤウー。あ、町長が来る。

ランスロット 町長？ こりゃ好都合。

(町長、走つて登場。)

町長 今日、エルザ。旅のお方は何処かね。

ランスロット 此処にいます。

町長 まず最初にお願ひする。小声で話して下さいさらんかの。それから身振りなしで。動く時にもゆっくりやつて戴きたい。それにもう一つ、目を見ないで欲しいのじゃ。

ランスロット 何故でしょう。

町長 わしの神経は酷い状態にあつてな。この世にあるありとあらゆる神経の病(やまい)、それにもつあと三つ、世にまだ知られて居らん病にも罹つて居るのじゃ。龍の下で町長を務めると言う事は並み大抵じゃないて。

ランスロット 龍を殺してお目にかけます。町長殿にも肩

の荷を下ろして戴きます。

町長 肩の荷を下ろす、八八、肩の荷を、八八、肩、八八。
(ヒステリー状態に陥る。水を飲む。収まる。) 龍様に貴方が挑戦なさったこと、これは不幸な事じゃ。この町は丁度うまく運んでおったところだったに。わしの補佐役、助役だが、これの横暴を龍様が抑え始めてくれていたのじゃ。粉屋協会の親分の、このやくざ助役奴を。貴方様の御陰で元の木阿弥。龍様は貴方様との闘いの準備で、町の運営など見向きもしなさらんじやろう。折角ここまで持って来たという時に。ああ。

ランスロット でも分かって下さい。私だって町を救おうと……

町長 町？ 八八。町？ 八八。町？ 八八。(水を飲む。静かになる。) 町の一つや二つ、犠牲にしても構わん。あいつをやつつける為なら。ひどい助役だ。龍が五匹でも居た方がましだ。あんな助役がいるよりは。お願いじゃ。出て行つて下され。

ランスロット 厭です。

町長 御免下され。カタレブシーの発作で……
(顔に苦い笑いを浮かべた儘堅くなる。)

ランスロット 町の人皆を助けるんです。分かって下さい。

(町長沈黙。ランスロット、彼に水をかける。)

町長 いや、分かりませんな。誰に頼まれたかの、闘うことを。

ランスロット 町中の方が望んでいます。

町長 そうかの。ちょっと窓の外を。町の錚々たる人々が

来ている。貴方様に立ち去って貰いたいとな。

ランスロット 何処に？

町長 ほら、壁の所に小さくなっている。皆さん、もっと近くに寄って下され。

ランスロット 爪先立ちで歩いて居ますな。

町長 わしの神経に気を使って呉れていますのじゃ。皆さん。じゃ、声を揃えてな。一、二の三。

町人達(声を揃えて。) 町から出て行け。す、ぐ、に。今日、す、ぐ、に。

(ランスロット、窓から離れる。)

町長 ほーら。お願いじゃ。わしらをかわいそうと思つて、ここはひとつ、町の人の希望を入れて欲しいんじや。

ランスロット そんな事するもんですが。

町長 御免下され。又発作で……(両手でやかんの把手と注ぎ口の形を作り、自分の体をやかんにする。) わしはやかんじや。沸かしてくれい。

ランスロット 分かった。なんで連中が爪先立って居たか。

町長 ほう。

ランスロット 町の立派な人達に気づかれない為だ。そうだ。その人達と話してみよう。(走って退場。)

町長 沸かしてくれ！(エルザに) 一体何が出来るつていんだ、あの男に。龍が命じればすぐ牢屋にぶち込むだけだ。

可愛いエルザ、心配はいらん。決められた時間に、決められた様に、龍様はお前を迎えに来られる。可愛いお前を抱き締めにな。心配はいらん。

エルザ 分かってますわ。(ノックの音。)(どうぞ。)(さっ

き龍を連れて来た従者登場。(

町長 ああ、お前か。

従者 ああ、お父さん。

町長 龍からの使いか。勿論闘いは無いんだろ？ あやつを牢屋にぶち込む命令で来たんだな。

従者 龍様はお命じになりました。第一、明日の戦いの時間を決めること。第二、ランスロットに武器を供与する事。第三、少し頭を使うこと。

町長 こりゃ困った。わしには使おうにも頭が。おい。あたまあー。かえってこーい。

従者 私への龍様の命令。エルザと二人で話す事。

町長 分かった。分かった。分かった。(急いで退場)

従者 今日は、エルザ。

エルザ 今日は、ヘンリー。

ヘンリー 君、助かると思う？

エルザ いいえ、あなたは？

ヘンリー 思わない。

エルザ 何？ 龍の話って？

ヘンリー 龍様の命令。ランスロットを殺せ。必要ならば。

エルザ (驚く) 何ですって？

ヘンリー 短刀で。これがその短刀。毒が塗ってある。

エルザ 厭だわ。

ヘンリー その言葉に対する龍様の伝言。さもないとお前の友達を一人残らず殺す。

エルザ いいわ。やってみる、と言って。

ヘンリー その言葉に対する龍様の伝言。ほんの少しの躊

躇いも、命令不履行として罰せられる。

エルザ あんたなんて大嫌い。

ヘンリー その言葉に対する龍様の伝言。忠実な部下は賞せられる。

エルザ 龍なんかランスロットに殺されるわよ。

ヘンリー その言葉に対する龍様の伝言。結果は見てのお楽しみ。(幕)

第二幕

(町の中央広場。右手に塔のついた町役場。塔の上に歩哨が立っている。正面に窓のない暗褐色の巨大な建物。地面から屋根までの巨大な一枚扉。鋼鉄で出来ている。扉には巨大な文字で「人間の立ち入り、絶対禁止」と書かれている。左手に広い昔の城壁。広場の中央に井戸。彫物のある手すり(庇(ひさし)が付いている。ヘンリーが、お仕着せは着ず、前掛けで、鋼鉄の扉の真鍮の飾りを磨いている。)

ヘンリー (鼻唄で) 結果は見てのお楽しみ。龍様のお言葉。結果は見てのお楽しみ、龍、龍、龍様はこう叫べた。さあさ、俺たちも見てみよう。

(町役場から町長走って登場。拘束服(囚人に着せる)を着ている。)

町長 おう、ヘンリー、人を寄越したのはお前か。

ヘンリー ええ、お父さん。役場では事がどう運んでいるのかわりたくて。町議会は終わった？

町長 何を言っとる。一晚中掛かって、やっと議事日程を

通せただけだ。

ヘンリー 疲れた？

町長 疲れた、などと、生易しい。最後の三十分でわしは三度も拘束服を着替えさせられた位じゃ。(欠伸。)雨が降るんかのう、今日は。わしのこのお有り難い精神分裂症も、えらい活気がよつて。謔言(うわごと)、謔言がでるんだ。それに幻覚、妄想、その他いろいろ。(欠伸。)煙草はあるか。

ヘンリー あります。

町長 ほどいて呉れ。一服しよう。

(ヘンリー、父を解く。宮殿の階段に並んで坐る。煙草に火を付ける。)

ヘンリー 武器の問題は何時決めるの？

町長 武器、とは何じゃ。

ヘンリー ランスロットのですよ。

町長 ランスロット、とは何じゃ。

ヘンリー どうしたんですか、お父さん。又、気違い？

町長 当たり前だ。何という良い息子だ、お前は。お前の父親がどれほど酷い病人かを忘れて居るんだからのう。(叫ぶ。)おお、人類よ、人類よ、互いに愛し合え。(静かに。)分かつたらう。この通りだ。謔言謔言。

ヘンリー 大丈夫です、お父さん、すぐ直ります。

町長 直る事くらい分かつてる。だがな、不快なものだて。

ヘンリー ああ、そうそう。大事なニュースがあります。

あの龍ちゃんが苛々して居るんです。

町長 まさか！

ヘンリー 本当です。ゆうべ一晩中、翼の疲れも構わず龍ちゃん、どこか飛び廻って居たようです。明け方になってやつと帰ってきて、ひどく魚の匂いを出して居ましたよ。苛々するといつでもそう。魚の匂いなんです。

町長 うん、うん。

ヘンリー それで分かつたんですが、我々の親愛なるもりちゃん、わざわざ一晩中あちこち飛び廻っていたのは、かの有名なミスターランスロットの秘密を探る為だったのですね。

町長 ほう、それで。

ヘンリー 何処の隠れ家ですか知りません。ヒマラヤのか、アララット山のか、スコットランドのか、コーカサスのか、とにかく捜しあてたんです。あのランスロットが、プロの英雄だつて事を。そんな家柄は僕は嫌いですがね。しかし、龍ちゃんはこの業界きつてのプロの悪役なんですから、どうやらその家柄ってやつに何らかの意味を与えた様です。いや、わめくやら、罵るやら、ぶつくさ文句を言うやら、大変でしたよ。そうこうするうち奴さん、ビールが飲みたくなつたんですね。好物のこれを一樽キユーつとやつたかと思つと、何の命令も出さずに、又羽根をさつと伸ばして、やれやれ、まだ空を飛び廻って居るんです。小鳥の様にスイスイ。お父さん、不安になりませんか。

町長 全然。

ヘンリー とうちゃん、教えて。僕より年をくつてるんでしよう。経験あるんでしよう。教えて、この闘いどうなるのか。お願い、答えて。まさかランスロットが・・・お役所流

の美辞麗句じゃなくて、ざつくばらんに。まさか勝つんじやないでしょう？ ランスロットが。ねえ、とうちゃん、答えよ。

町長 ああ、ヘンリーちゃん。ざつくばらんに、腹を割つてな。なあ、お前、わしはだ、あの龍ちゃんが心から好きなんだ。愛着がある。嘘じゃない。天地神明にかけてもだ。もう親戚も同様だ。な。どう言ったら良いか、この命を捧げてもいい位。うんそくだ、この場で今雷に打たれても構わんと思うとる位じゃ。何の、何の、何の。勝つ。龍様は勝つ。何が何でも、かにかんでも、やにかんでも、だにかだんでも、勝つ。わしはこれほど龍様を慕って、慕って、お慕い申し上げるとるんじやーお終い。はい、これがお前への答え。

ヘンリー とうちゃん、とうちゃんは答えて呉れないのか、ぶちあけて、腹を割って、本当の事を。一人しかない息子の僕にも。

町長 厭だね、ヘンリー。わしはまだそれほど気遣いにはなつて居らん。いや、勿論わしは気遣いだ。だがの、それほどまでにはだ。龍様からの命令だろう？ 尋問して来いという？

ヘンリー 何て事を、お父さん。

町長 なかなかやりあるな、ヘンリー。良い会話の運びだ。自慢してもよいほどだ。いや、お前の父親だから褒めとるんじやない。本当だ。その道のベテランとして、町役場に勤務する一介の町長として誇りに思うのだ。覚えとるだろうな、わしの答えを。

ヘンリー 勿論です。

町長 で、こいつもだな。何が何でも、かにかんでも、やにかんでも、だにかだんでも。あ？

ヘンリー 覚えています。

町長 よし。じゃその様に報告だ。

ヘンリー 分かりました。

町長 わしの一人息子はスパイもつまい。出世街道を慕進だ。金はいらんか？

ヘンリー 今はいりません。有り難う、お父さん。

町長 遠慮はいらん。持つて行け。唸るほどあるんだ、今。丁度昨日、人の物を盗む例の発作が起こつてな。持つて行け。

ヘンリー でもいいです。ね、今度こそ本当の事を教えて貰いたいんだけど・・・

町長 本当、本当って、子供の様な事を言つのはやめだ。わしはな、実際、そんじよそこらのただの人とは違つんじや。

町長だ。本当の事などこの何十年話した事がない。忘れてしもつた。何だ、本当とは。わしは本当からそつぽを向かれ、しよいなげを食わされとるんだ。お前だつて知つとる筈だ。

おあり難い本当様はどんな味がするか。もう沢山だ。龍様万歳。龍様万歳。龍様万歳。

(塔の上の見張りが矛で床を叩く。叫ぶ。)

見張り 気を付け！ 右向け！ 空。灰色の山に陛下のおでまし！

(ヘンリーと町長、跳び上がる。一線に並ぶ。頭を空に向けて。遠くに鈍い唸り声が聞こえ、又静かになる。)

見張り 休め！ 陛下は向きを変えられ、煙と炎の中におかれ！

ヘンリー 巡察ですね。

町長 そう、そう。なあ、ヘンリー、お前わしにちょっとだけ質問に答えてくれんか。龍様は何の命令も出さなかったか。あ？

ヘンリー ええ、何も。

町長 殺すんじゃないのか。

ヘンリー 誰を。

町長 救世主じゃよ。あの救い主を。

ヘンリー お父さん、何て事を。

町長 言ってくれ、ヘンリー、こつそり。命令があつただろう。ランスロット殿を殺せと。いじいじせんではつきり言うたらどうだ。あ？ どうしたんだ。よくあることだ。ああ？ヘンリー。言わんか。

ヘンリー 言いません。

町長 そうか、じゃ、ま、言わんでもいい。すまじきものは宮仕え。のう。どうしようもない。

ヘンリー 忘れては困るであります、町長殿、今すぐにもとり行わねばならぬ事態となりますぞ。英雄ランスロット殿への莊重なる武器授与式を。龍殿御自身授与式におでましの場合もあり得るといふのに。とうちゃん、だらし無いかつこして。

町長 (欠伸、伸びをする。) さて行くとするか。武器か、武器ならそこらへんに転がっておる。ランスロットの奴に満足して貰えるものがな。手を結わえてくれい。おや、現れおつた。ランスロットだ。

ヘンリー まずい時に。あいつをどこかへ連れて行って、

お父さん。エルザが来るんです。話があるんです。

(ランスロット登場)

町長 (ヒステリー声で。) これはこれは。素戔嗚尊(すさのおのみこと)。なんといい嬉しいおでまし。おお失礼仕つた。夢とうつつが入り混じり・・・しかしよく似てお出でて、つきり・・・

ランスロット そうでしょう。無理もありません。あれは私の遠い親戚で。

町長 夜は如何お過ごしで？

ランスロット ただぶらぶらと。

町長 誰かとお友達になられて。

ランスロット 勿論。

町長 誰とじゃな。

ランスロット この町の人々は勇気がないんですね。私を怖がって犬をけしかけるんです。ところがこの町の犬達は利口ですね。仲良しになったんです。犬達は飼い主思いでしてね。飼い主によかれと思つて私の話を聴いて呉れましたよ。御陰で夜明けまで話しこんで。

町長 蚤がたかりませんでしたか。

ランスロット いや、手入れの行き届いた見事な犬達でした。

町長 名前は？ 覚えておられませんか？

ランスロット 口止めされています。

町長 我慢ならん奴等だ。

ランスロット かわいそうに。嫌われて。その理由もないのに。

町長 連中は少し単純過ぎて。

ランスロット 単純？ 単純で人間を愛せましようか。あの犬達は知って居るんです。自分達の飼い主がどんな人間か。泣いて居るんです。それなのに愛しているんです。真の苦勞人です。単純だなんて。お呼びでしたか。

町長 お呼びです、と叫んで、駝鳥は蛇を食い。お呼びかな、と大王、王妃をチラと見て。あらお呼び、と美人が馬で駆けて来る。さよう、お呼び申した。ランスロット殿。

ランスロット 何か御用で？

町長 チーズの御用はデパートで。娘の御用は超ミニよ。鴨なら御用は葱なのね。さよう、御用じゃ。町議会では貴殿をお待ちしておる、ランスロット殿。

ランスロット 何故。

町長 何故だろう。菩提樹、通りに植えてある。何故だろう、キスがいいのにダンスする。何故だろう。蹄の首でキスをする。町議会の議員達は親しく貴殿に会うの光栄を持たねばならんのじゃ。判断する為にな。どの様な武器が貴殿に最もふさわしいか。さあ、こちらへ来てください。二人、退場。）

ヘンリー 結果は見てのお楽しみ、龍様のお言葉、結果は見てのお楽しみ。龍、龍、龍様は、こう吼えた。さあさ、俺たちも見てみよう。（エルザ、登場。）エルザ！

エルザ そう、私、お呼びになった？

ヘンリー うん。なんて残念なんだ。塔の上に歩哨がいるなんて。あんな邪魔が無かったら君を抱きしめて接吻しているところなのに。

エルザ そして私にほつぺたを叩かれている所だわ。

ヘンリー ああ、エルザ、エルザ！ 君は何時も行儀が良すぎるよ。でもそれが似合うんだなあ。その恥じらいの後ろには何か隠されているんだ。だから龍ちゃんは君にむすめを感じるんだなあ。あいつは何時だって一番有望な一番娘らしい、一番のお転婆を選んだ。そう、そう。ランスロットはまだ君に言い寄ってはいいだろう？

エルザ お黙りなさい。

ヘンリー そんな事ある筈がないよな。君じゃなくって腰の曲がったお婆さんでも、あいつなら挑戦してたろうからなあ。あいつには誰だっていいんだ。助けさえすりゃ。そう仕込まれているんだからな。第一君の顔がどんなのかよく見ても居ないよ。きつと。

エルザ 会ったばかりですもの。昨日。

ヘンリー そんなの言い訳にはならないよ。

エルザ お呼びになったの、それを言うため？

ヘンリー 違う、違う。君に聞こうと思つて。僕と結婚してくれるかどうか。

エルザ やめて頂戴。そんな事。

ヘンリー 本気なんだ。君にこう言えつて言われて来たんだ。もし君がおとなしく言うことを聞いて、ランスロットを殺してくれたら、褒美に龍ちゃんは君を自由の身にして呉れるつて。

エルザ 厭よ。

ヘンリー 終わりまで聴いてくれよ。君の代わりに選ばれるのはね。君の全然知らない人なんだ。平民なんだよ。それ

にどうせ来年選ばれる事になっていたんだ。さあ、どっちが
良いか、君だつて分かるだろう。馬鹿らしい死に方をするか、
生きる方を選ぶかなんだぜ。生きてご覧、夢にまで見て居た
あの喜びが返つて来るんだ。話がうますぎて腹がたつて来る
程じゃないか。

エルザ　なんて卑怯なの。怖くなったのよ。

ヘンリー　誰の事？　龍ちゃんかい？　それは違つなあ。

僕は奴の弱点は皆知つてる。頑固で、下品で、居候さ。だ
けどね、勇氣はあるんだ、勇氣は。

エルザ　昨日は脅迫、今日は取引ね。

ヘンリー　みんな僕が仕組んだ事さ。

エルザ　えっ？

ヘンリー　本当の事を言つとね。龍を退治するのはこの僕
なんだ。ぼくはやろうと思えば何でも出来る。今度だつて機
会を窺つていたんだ。僕はね、君を誰かに譲り渡す様な馬鹿
じゃない。

エルザ　そうかしら。

ヘンリー　そうさ。

エルザ　でも、どっちも同じよ。私、人は殺せないもの。
ヘンリー　そう言っているながら短刀は持つてるじゃないか。
ほら、その帯の所に差してある。エルザ　僕は行くからね。
礼服に着替えなくちゃ。でも安心して行つてくるよ。僕の為
にも、君の為に、命令は実行してくれるだろうからね。だつ
て考えてご覧よ。死なないですむんだ。生きて行けるんだ。
君がその気になりさえすれば。よく考えてね、エルザ。僕の
かわい子ちゃん。（退場）

エルザ　なんていうこと。頬が熱いわ。あの人とキスした
みたい。私つてなんていやらしいんでしょ。あの人の言う
事を聞きそうだわ。私つてどうせそんな女・・・いいわ。ど
うだつていい。仕方無いわ。もう沢山。私、この町で一番良
い子だった。皆の言うことをハイハイつて聞いてきたわ。そ
れが今じゃどう？　皆、私の事を偉い偉いつて褒めて呉れた
わ。それがどう？　他の人の方が幸せじゃない。今頃あの人
達、家に居るわ。着て行く着物を選んだり、裾飾りにアイロ
ンを掛けたり、髪を綺麗に結つたりしているわ。私の不幸を
見に来る為。ああ、見える様だわ。鏡台に坐つて、白粉を塗
りながら言っているの。「かわいそうなエルザ、かわいそう
な娘さん。あんな良い子だったのに。」私一人、私たつた一
人だけ、この広場に立つて苦しんでいるんだわ。あの馬鹿な
歩哨、目を円くしてこちらを見ている。想像しているのよ。18
今日私が龍にどんな目に会うか。あの人明日だつて生きてい
るわ。当直が終わればお休み。滝のあるあの山に遠足に行く
んだわ。あそこでは川は本当に楽しそうに跳びはねているも
のだから、どんなに悲しい顔をした人でも、ついにつこりし
て仕舞つ。滝じゃなくて公園の方にするかしら。植木屋が新
発明の、目のあるさんしき董を栽培しているあの公園。あの
董、可愛いわ、ウインクしてくれるんですもの。それに本が
読めるの、大きな字の本なら。お話がハッピーエンドなら。
それともあの人湖に行くのかしら。いつか龍が沸騰させた。
あれ以来水の精達はすっかりおとなしくなつて、人なんかお
ぼろせないの。それどころか浅い所に坐つて救命胴着を売つ
ている。でもやっぱりあの人達綺麗だわ。だから歩哨達あの

人達とお喋りするのが好きなの。明日もきつとそう。あの歩哨、水の精に話すわ。「なんて素敵なお音楽だった。皆涙を流したんだ。でも龍はエルザを攫って行った。」って。水の精はそこで溜め息をつくの。「ああ、かわいそうなエルザ。ああ、かわいそうな娘さん。今日はこんなに良い天気なのにあの人はもういないのね。」厭よ。何でも見たいわ。何でも聴きたい。何でも感じたい。そうよ。幸せになりたい。そうなの。私、短刀は持って来た。これで死のうと思つても死なない。そう、死なないわ。

(ランスロット、町役場から登場。)

ランスロット エルザ！ なんて嬉しいんだ。また会えて。

エルザ 何故ですか。

ランスロット ああ、エルザ、今日は全く辛い日なんだ、僕にとつて。たった一時でいい、ホツと出来ればと思つていたんだ。丁度その時、まるで天の助け。突然君に会えるなんて。

エルザ 町議会にいらして？

ランスロット うん。

エルザ どうして貴方を呼んだの？

ランスロット お金をやるうって。龍に挑戦さえしなければ。

エルザ なんてお答えになつて？

ランスロット 「なあんで馬鹿な連中だ。」って。もうあいつらの話は止めよう。エルザ、君は今日、昨日よりずっと綺麗だね。こりやもう間違いない。僕は君が好きになつて仕舞つたんだ。信じて呉れるだろうか？ 僕が君を救つて事？

エルザ いいえ。

ランスロット (えっ?) でも僕は腹が立たない。よっぽど君が好きになつて仕舞つたんだ。

(エルザの友人達、走つて登場。)

エルザの友人一 ほーら、私達よ。

エルザの友人二 私達、エルザのいい友達。

エルザの友人三 私達、子供の頃から、ずーっと、いい友達。

エルザの友人一 エルザは私達の中でいちばん賢かった。

エルザの友人二 エルザは私達の中でいちばん可愛かった。

た。

エルザの友人三 それなのにエルザ私達にいちばんよく

してくれたの。代わりに縫い物はして呉れるし、算数の宿題は解いて呉れるし、暗い気持ちになつた時は慰めて呉れたわ。

エルザの友人一 遅刻じゃなかったかしら。

エルザの友人二 本当に闘うの、貴方。

エルザの友人三 ランスロット様、私達の為に役場の屋根

に席をとつておいてくださらないこと？ 貴方が頼んで下されば、断られるって事はないと思つわ。私達決闘をよく見

て置きたいんですもの。

エルザの友人一 あーら、貴方怒つたのね。

エルザの友人二 私達とは口をきかないつもりなのね。

エルザの友人三 でも私達そんなに悪い娘じゃないのよ。

エルザの友人一 貴方思つてるんでしょ。わざとエルザ

との別れを邪魔してらつて。

エルザの友人二 わざとじゃないの。

エルザの友人三 わざとじゃないの。

エルザの友人二 わざとじゃないの。

エルザの友人三 わざとじゃないの。

エルザの友人一 わざとじゃないの。

エルザの友人二 わざとじゃないの。

エルザの友人三 命令されてやってるんだわ、ヘンリーから。貴方方二人だけにしておいたらいけないって。だって龍様がお許しを出してないんだから。

エルザの友人一 お喋りをしていなさいって言う命令・・・エルザの友人二 だから私達お喋りしているの。馬鹿みたいに。

エルザの友人三 だつてお喋り止めたら涙が出てくるわ。それに貴方余所の人でしょう？ 余所のひとの前で泣くなんて恥ずかしいことよ。

(シャルルマーニュ、町役場から登場)

シャルルマーニュ 町議会は終わりました、ランスロット様 貴方の武器に関する決議がなされました。お許し下さい、この私達を。私達は人殺しです。狡い人間です。

(ラッパが鳴る。町役場から召使達が走り出る。絨毯を敷き、椅子を三脚置く。真ん中には贅沢に飾られた肘掛け椅子。左と右にはそれほどでもない椅子。町長登場。町議会の人々に囲まれて。非常に上機嫌。ヘンリー、華麗なお仕着せを着てその中にいる。)

町長 そりゃ面白い話だ。で、その女何ちゆうた？ 「どんな子供だつてそんなこと出来ると思ったわ。」とな？ はっはっは。ところでこの話は知つとるかの。いや、可笑しい話だ、ジブシーの首を切り落としたつちゆう・・・

(ラッパが鳴る。)

町長 おお、用意が出来たか・・・なら、話は式が終わつてからじゃ。わしが忘れておつたら、催促するんだぞ、いいか。さあさあ、町議の皆さん、はいとこ済ませてしまお

う。(町議会議員達、真ん中の椅子の両側に立つ。ヘンリー、その椅子の後側。町長、空の椅子にお辞儀。早口に言う。)

畏多くも、龍様。龍様の「ご信頼を受けまして、私共町議会は、以下の如き重大なる決議を行いましてござります。どうか、龍様、名譽ある議長の席にお着き下され。お願いでござります。お願いでござります。お願いでござります。これはいかなこと。しかし致し方なしじゃ。わしらだけで始めるか。

着席ください、皆さん。町議会の開がいを・・・(間。)(水。(召使、井戸から水をくんで来る。町長飲む。)(町ぎくわいのくわいくわい・・・水！(飲む。喉をがらがらと言わせ、吐く。非常に高い声で、)町議会の(低い声で。)(開会を・・・

水！(飲む。高い声で)済まないわねえ、貴方。(低い声で。)(下がれ、このろくでなし。(自分の声で。)(ご同慶のいたりじゃ。皆さん、又精神分裂症じゃ。(低い声で。)(何²をやりくさつとるんだ。このすべため。(高い声。)(分らないの、あんた。わたしは議長よ。(低い声。)(女のやることか、このつ。(高い声。)(あんた、あたしだつて厭な

よ。そんなこと言つと余計やり難くなるじゃやない。記録を読んで頂戴。(自分の声。)(議題、ランスロット某への武器の供与について。決議事項、供与すべし。但し渋々。おーい、

其処の者、ここへ武器を。(ラッパ、鳴る。召使登場。第一の召使、ランスロットに小さな銅の洗面器を与える。それには細い革紐がくつつけてある。)

ランスロット これは床屋の金だらじゃないか。

町長 さよう、但し我々はこれに「兜職代行」と名づけま

した。それからこの盆。これの名が「楯」。心配は御無用じゃ。

この町では人だけじゃない、道具もよく言うことをきく。この二つの武器も立派に、誠実にその義務を全うする筈だ。鎧だが、蔵を捜したが見つからん。残念だ。だが槍はあった。

(ランスロットに証明書を見せる。)(これが証明書。「現在、槍は修理中に付、使用不能。」な?ここに署名、捺印、真正銘の証明書だ。決闘の際に、これを龍様に見せるんじや。)

そうすればすべてうまく行く。はい、これでお終い。(低い声で。)(町議会閉会ね、おばあちゃん。(高い声で。)(そう、お終いよ、お終いよ。厭な会議はお終いよ。あら、皆さん怒ってる?怒ってる。でも分らないでしょ、自分でも。どうしてそんなに怒ってるか。(歌う。)(一、二、三、四、五、六、ナイトがお散歩・・・(低い声で。)(閉会じゃ。このすべため。(高い声で。)(あら、私何をしているのかしら。)

(歌う。)(突然龍ちゃん舞上がり、真っ直ぐナイトに飛び掛かり・・・バンバン、ダダーン。町議会閉かい。)

歩哨 気をつけー、空向けー空。灰色の山に陛下のおでまし!只今旋回の後急降下中。(全員飛び上がり、気を付け。顔を空に向ける。遠いキンという音、急に拡大する。場、暗くなる。真っ暗になり、音、急に止む。)(気を付けー。太陽を黒雲の如く闇に包んで、陛下のおなり。息止めー息。)

(二つの緑の光、急に燃え上がる。)

猫 (囁き声で。)(ランスロット様。私です。猫です。)

ランスロット (囁き声で。)(目ですぐ分かったよ。)

猫 城壁の所で寝てますからね。頃を見計らって来て下さい。良い事を教えてあげます。

歩哨 気をつけー。陛下、広場におでまし。

(耳を聳する金属音。光、急に燃え上がる。真ん中の椅子に、ごく小さな死人の様に真っ青な中年の男が崩した正座で坐っている。)

猫 (城壁から。)(ランスロット様、驚かないで。第三の顔ですよ。気が向いたのに変えるんです。)

町長 陛下。陛下に統治をお任せ戴きましたこの町は、現在異常なしであります。逮捕者一名。罪科は・・・

龍 (ひび割れたテノールで、非常に静かに。)(下がれ。全員下がってよし。旅の方を除いてな。)(全員、退場。ランスロット、龍、猫、残る。猫、城塞に背を円くしてまどろむ。)(どうだ、元気かな?)

ランスロット 至って。

龍 何だ、その金盞は?
ランスロット 武器だ。
龍 あいつらだな。
ランスロット そつ。

龍 失敬なやつらだ。さぞ腹を立てておられるであろう。
ランスロット 腹など立ててはおらぬ。
龍 嘘を言うな。私には冷たい血が流れている。その私でも怒る所だ。あいつらが怖いか。
ランスロット いや。

龍 嘘を言うな。怖いはずだ。あの連中は怖いやつらだ。あんなやつらはこの世の何処を捜してもいはしまい。私の

作品だ。この私が連中を作ったのだ。
ランスロット しかし彼らも人間。

龍 外見はな。

ランスロット 中身も。

龍 もしやつらの心が見えたら・・・おお、ぞっとするであらう。

ランスロット そんな事はない。

龍 すたこらと逃げ出すであらう。かたわの為に命を掛ける馬鹿はいない。お若い。私はな、連中をこちらの都合に合わせてかたわにしたのだ。人間の心はなかなかの物だ。生命力がある。体を半分に切りゃあ、人間は死ぬ。しかし心を半分に切った所で死にはせん。少しおとなしくなるだけだ。いやいや、連中の持っている様な心は他のどこを捜してもありはせん。この町だけだ。手のない心。足の無い心。聾の心。鎖に繋がれた心。告げ口の心。呪われた心。分かつているか。何故町長が精神分裂の振りをするか。隠す為だ。自分には全く心が無いことを。擦り切れた心。買収された心。はらわたの抜かれた心。死んだ心。全く残念なことだ。連中の心が見えないのが。

ランスロット 却ってそれが幸せなのだ。お前にとつて。

龍 ほう。何故。

ランスロット それが分からないのか。連中は自分の心がどんなに変わったかを自分の目で見えるのだ。驚き呆れて、死んでしまふさ。おめおめと生き残っているものは居まい。そうなつたらお前は誰に食わして貰つのだ。

龍 そんな事は知らぬ。しかしその通りかも知れぬ。じゃそろそろやるか。

ランスロット よからう。

龍 その前に、娘と別れを告げたがよからう。命を捧げるんだからな、その娘の為に。おい、小僧。(ヘンリー、走り登場。)エルザを連れて来い。(ヘンリー、走り退場。)私が選んだ娘、どうやらお気に召した様だな。

ランスロット 気にいった。大変気に入った。

龍 それを聞いて嬉しい。私も大変気に入っているのだ。素晴らしい娘だ。おとなしい娘だ。(エルザ、ヘンリー登場)さあ、こちらへ。もっと近う。私の目を見て。そう。じーっと。綺麗な目だ。手にキスをして。そう。気持ちがい。唇から暖かみが伝わって来る。お前の心が落ち着いている証拠だ。別れを告げたいか。ランスロットと。

エルザ お言葉の儘に、龍様。

龍 ではそう命令する事にしよう。行きなさい。親しく話してきなさい。(小声で。)愛想よく優しく話すんだ。別れのキスをするんだ。大丈夫。私はここを動かんから。それから一突に殺せ。大丈夫。大丈夫。私がついている。さあ、行って。ここから少し離れたって構わんからな。どうせよく見えるんだ。全部見ているからな。さあ。(エルザ、ランスロットに近づく。)

エルザ ランスロット様。貴方と別れを告げよって、龍様が。

ランスロット 分かった。別れを告げておこう。万一の場合もあるからな。この闘いは生きるか死ぬかだ。僕が死ぬ事だつてあり得るさ。別れに当たつて君に言つて置きたい事があるんだ、エルザ。僕は君を愛している。

エルザ 愛!

ランスロット そう。あれはまだ昨日のことだ、君が気に入ったのは。君は家に帰って来る所だった。お父さんと一緒に。なあんて静かに歩いて来るんだろう。窓から覗いて見て居たんだ。それから君に会う毎に君は綺麗になっていく。「ハハア、これだ。」って僕には分かったのさ。君は龍の手にキスした。それなのに僕は怒らなかつた。怒りじゃない。悲しくなつちやつたんだ。それで今度はすっかり正体が分かったのさ。愛なんだ、エルザ。僕は君を愛してるんだよ。怒らないで。僕はこれを君にどうしても知って置いて貰いたくって。

エルザ でも私じゃなくて他の女の子だったって、龍に挑戦していたんでしょう？

ランスロット そりゃそつさ。挑戦するに決まってるよ。僕はね、ああいうのが嫌いなんだ。この龍みたいなのが。でも君の為だったらね、素手であの首を締めたっていいよ。とても薄気味悪いけど。

エルザ じゃあ、私、本当に愛されているのかしら。

ランスロット そつだよ。恐ろしいねえ、もしだよ、もし僕が昨日あの三叉の道の所で、右じゃなく左に曲がっていたら、君とは会えなかつたんだからね。恐ろしいだろう、ね？

エルザ ええ。

ランスロット 考えても恐ろしい。僕には、今じゃ君より近い人は誰もいないんだ。君のこの町だって僕は自分の町のように思えるんだ。だって君が其処に住んでいるんだから。たとえ僕が決闘で・・・いや、たとえもう僕達これから話す事が出来なくなつても、僕のこと忘れないうて呉れるね。

エルザ ええ。

ランスロット 忘れないうで。ああ、エルザ、君、始めて見て呉れたね、僕の目を。今日始めて。暖かい風が僕の体を通って行くみたいだ。（君の暖かい手が僕に触れているみたいだ。）僕は諸国遍歴の男、身の軽い男なんだ。身は軽くても気の重くなる辛い闘いに明け暮れているのさ。こつちでは龍、そつちでは人食い人種、あつちでは大男。しよつ中かかわり合いになつて・・・これが面倒な仕事なんだ。却つてうらまれたりしてね。それでも僕は何時だって幸せだよ。疲れたことはないんだ。よく恋をするし。

エルザ よく？

ランスロット そう、よく。あちこち遍歴するだろう？

闘つたろう？ すると女の人と知り合いになつて仕舞うんだ。だって何時だって女の人なんだからなあ。山賊に捕らわれたり、大男の袋の中に入れられたり、人食い人種に食べられそ²うになつているのは。それにこつちう悪い奴等つて必ず美人を選ぶんだ。特に人食い人種はね。だから恋をしちゃうんだ。だけど今みたいな気持ちになつた事つて今までにあつたろうか。連中とは僕は何時だって冗談ばかり言つて居た。よく笑わせたなあ。でもエルザ、君は違う。あんな奴が居なかつたら、僕たちだけだったらね、エルザ、僕は、僕にキスしているよ。本当さ。ここから君を連れ出してね。二人で歩いて行くんだ。森を通り、山を越えて。歩いても行けるさ、その気になれば。いや、やつぱり僕は馬を捜して来る。その鞍はね、よく出来ていて、君は決して疲れないんだ。僕は君の鎧の所においてね、君を眺めながら歩くんだ。どんな奴が来たつて君に指一本触れさせるものか。（エルザ、ランスロット

トに腕を伸ばす。()

龍 いいぞ、いいぞ、エルザ。まずてなすけようって訳だ。
(突く動作。)

ヘンリー さようであります、陛下。エルザは頭の良い女
であります。

ランスロット エルザ、君、泣きそうな顔をしているね。
(ここで始めて。)

エルザ ええ。

ランスロット どうして。

エルザ かわいそうなの。

ランスロット 誰が。

エルザ 私と、そして貴方と。私達には幸せはないんだわ、

ランスロット。ああ、私、どうしてこんな龍なんか居る

町に生まれたのかしら。

ランスロット エルザ、ね、僕は嘘は言わない。僕達、幸

せになれるんだ。ね、僕の言うことを信じて。

エルザ 止めて、止めて頂戴。

ランスロット 僕達は行くんだ。あの森の小道を。幸せに

心弾ませて。君と僕と二人きりで。

エルザ 止めて、お願い。止めて。

ランスロット 空は晴れ渡って居るんだ。僕達の頭上で。

空から飛び掛かって来るものなんか何もないのさ。

エルザ 本当？

ランスロット 本当さ。このかわいそうな町では、誰も知っ

てはいないのさ。愛し愛されるといふことがどんな事か。本
当の愛の前ではね、恐れも、疲れも、不信も、みんな焼けて

無くなつて仕舞うんだよ。永遠に。そんな風に僕は君を愛す

るんだ。君はね、まどろもつとする時自然に微笑みが浮かん
でくる。目を覚ます時、又微笑むんだ。そしてね、ランスロッ

トって呼ぶんだ、僕の事を。こんな風に僕の事を愛してくれ
るのさ。自分の事も愛するんだ。歩く時だつて胸を張つて歩

くのさ。僕が君にキスしたら、そりや君がそんなに素敵だか
らなんだつて、君にはすぐ分かるのさ。森の木立だつて僕た

ちに優しく話しかけて呉れる。小鳥だつて、獣達だつて。何
故だと思つ？ それはね、本当に愛し合つている二人なら何

でも分かるからなんだ。全宇宙と一体になるからさ。そして
皆が僕達を祝福して呉れる。僕達の方も皆に幸せをもたらす
んだからね。

龍 あの男、一体何を気取りやがつて、御詠歌うたつてい
るんだ。

ヘンリー お説教でしょう、龍様。学問は光、無学は闇。

御飯の前には手を洗え。と、まあ、こんな具合に。あいつは
どうも無粋な男で・・・

龍 ハハーン、男の肩に手をおいたぞ。なかなかやるー。

エルザ 私、そんな幸せまで待たなくていいわ。だつて今、
幸せなんですもの。あの怪物達私達を見ている。でも私達あ

の人達からは、ずーっと、ずーっと、遠くに居るんだわ。私
今まで一度だつてないわ。あんな風に話されたこと。貴方の

様な人がこの世にいるなんて私思つても見なかった。私おと
なしかつた。昨日もまだ大のように。貴方のことを考えるの、

いけない事だと思つていたわ。それでも夜、父に隠れて、下

に降りて貴方のコップに残つて居たお酒を飲んだの。今始め

て分かったわ。あれは、私、こつそり、貴方に夜中、感謝のキスをしたんだわ。龍から救おうと、私の為に闘って下さる貴方への感謝。お分かりにならないわ、きつと。私の心ごちゃごちゃなんですもの。かわいそうな私達娘の心。ついさっきまで私、貴方のこと嫌いなんだと思って居た。でも知らない内に貴方を慕っていたんだわ。ランスロット、私貴方を愛している。なんて嬉しいんでしょう、こんなにはつきり言えて、なんて・・・(ランスロットにキス。)

龍 (苛々して足を踏みならず。) 今だ、今やるんだ。今。エルザ 放して頂戴、ランスロット。(抱擁を解く。鞘から短刀を出す。) 見て、この刀。これで貴方を殺せて。龍の命令。見ていて。

龍 そこだ、そこだ、そこだ。
ヘンリー やれ、やれ。(エルザ、短刀を井戸に投げる。)
なんていう奴だ。

龍 (大声で。) よくもやったな!

エルザ もう一言だって許しませんよ! 乱暴な言葉を使われては、黙っていません。ランスロットが愛を誓った。私も愛している。お前はこの人に殺されるのよ。

ランスロット その通りだ、わが敵、龍君。
龍 そうか、そうか、そうとあらば、闘わねばなるまい。

(欠伸。) 正直の話、この成り行きも悪くはない。最近私はなかなか面白い手を編み出した。幻のジャブと言うんだが、実際に人体実験出来るとは有りがたい。従卒、衛兵を呼べ。

(ヘンリー、走り退場。) 家に帰っておれ、エルザ。決闘の後、話合おう。ざっくばらんな。(ヘンリー、衛兵と共に

登場。) いいか、衛兵。エート、何を頼むんだったかな・・・ああ、そう。このお嬢さんを家に連れて行って、そこで監視するんだ。(ランスロット、一步踏み出す。)

エルザ 待つて頂戴。力を溜めて置いて。龍を負かしてから来て頂戴。お待ちして居ますわ。今日言っただけの一言を、思い出しながら。きつと勝つわ。

ランスロット 必ず迎えに行く。

龍 そのぐらいでいいだろう。連れて行け。(衛兵、エルザを連れて退場。)

ヘンリー、塔の見張りをひつとらえて、牢屋にぶち込め。夜になったら首を切れ。あいつは聞いているからな。娘が私に怒鳴ったのを。兵舎でこんなことを喋られては叶わん。処置しろ。そのあと私の爪に毒を塗りこんでくれ。(ヘンリー、走り退場。)

(ランスロットに) お前は此処にいるんだぞ。待つている。いつ始めるか、それは言わん。本物の戦争は戦宣告なしで始まるのだ。いいな。(椅子からおり、宮殿に退場。ランスロット、猫に近づく。)

ランスロット さあ、猫君、何かいいこと教えてくれるって言っただけ。

猫 右手をみて下さい、ランスロット様。もうもうと埃がたつていますね。あれはろばです。しきりに蹴つ飛ばしているでしょう。五人掛かりで引きずっていますね? ちよつと歌でも歌って呼び寄せましょう。(ミヤー、ミヤー、言う。)

ほら、ろばの奴、素直になつて真つ直ぐこつちへ来るでしょう? あらあら又城壁の所で愚図りだした。近づいたら馬曳

きの連中に声を掛けて下さい。さあ、来たぞ。(城壁の向こうにろばの首が出る。埃の煙の中に立ち止まる。五人の馬曳

きがるばに怒鳴っている。ヘンリー、広場を横切って走り登場。）

ヘンリー（馬曳き達に。）お前達は此処で何をしているのか。

馬曳き（二人）（声を揃えて。）売り物を市場へ持って行く所で、お役人様。

ヘンリー 何だ売り物は。

馬曳き（二人） 絨毯でございます、へい、お役人様。

ヘンリー 早く行け。宮殿だ、ここは。愚図愚図するな。

馬曳き（二人） こいつが動かさうとしませんでして、へい、お役人様。

龍の声 ヘンリー！

ヘンリー 早く行け。そら、行くんだ。（走り、宮殿に入る。）

馬曳き（二人） 今日は、ランスロット様。私共はお味方でございます、ランスロット様。（声を揃えて咳払い。）クハツ、クハツ。気を悪くなさるんで下さい、私共が声を揃えて話しても。小さい頃から一緒に仕事をしております、心を合わせて来ましたので、考えるのも一緒、話すのも一緒、まるで一人の人間です。同じ日に、それも同じ瞬間に、女に惚れて、そちらも双子でめでたく結婚。私共ははた織りで、沢山織つて参りました。でも一番良い織物は今日、今、此処に、貴方様の為にお持ちしました、これでございます。（ろばの肩から絨毯を下ろし、地面に広げる。）

ランスロット これは綺麗な絨毯だ。

馬曳き（二人） 左様でございます。品質は最上。羊毛と

絹の混紡。そもそも私共秘密の製法によるものでございます。しかし、この絨毯の不思議さは、羊毛にも、絹にも、そこにもありません。（小声で。）これは空飛ぶ絨毯。

ランスロット すごい。早く教えてくれないか、運転の仕方。

馬曳き（二人） 畏まりました、ランスロット様。此の隅が上昇。これを曲げると上上がりします。太陽の絵がありますね。ここが下降。地面がかいてあるでしょう。ジグザグ飛行はここ。燕の絵です。そしてここが龍の隅。これを曲げると急降下して真直ぐ龍の頭に突撃します。ここにはワインの入ったジョッキと素敵なオードブルの絵があるのでしよう。勝つて一杯やって下さい。いえいえ、お礼などおっしゃらないで。

私共のひいじいさんも何時も道路を眺めていました。貴方様を待っていたんです。爺さん達だつて。そしてやっと私共が26

待った甲斐があつたのです。（急に退場。同時に三番目の馬曳きが手に厚紙のケースを持って走り登場。）

三人目の馬曳き これは、これは、旦那様。一寸失礼をば致します。頭を少おしこちらにお向けになって。あ、今度はあちらに。はい、よろしうございます。私奴は帽子屋でございます、世界中で一番の帽子を作っております。この町ではよく知られた男でございます、ハイ。どんな犬でも私のことは知つて呉れております。

猫 猫だつて知つてますよ。

三人目の馬曳き ほら、ごらん下さい。仮縫いなんかしくとも、お客様の頭をちらりと見ただけで、ちゃんと拵えるんです。それが又よくお客様をピカピカにする。そいつがなん

が楽か。何も期待せずにまどろんでいればいいんだからな。
な、そうだろ、ろば君。(ろば耳を動かす。)僕は耳では喋れないよ。言葉で話して呉れないか。僕達お互いによく知らないけど、一緒に仕事をやろうと言っただから、友達甲斐に一言ミヤーぐらいは言えるだろう。じつと黙って待つのは辛いよ。ミヤーぐらい一緒に言おうよ。

ろば ミヤーは賛成出来ないな。

猫 それなら話でいいよ。龍の奴、ランスロット様がまだここに居ると思ってるぞ。影も形もないのにな。可笑しいね、な？

ろば (陰気に。)可笑しい。

猫 何故笑わないんだい。

ろば 殴られるんだ、僕が声を上げて笑うとね。人間共は言うんだ。又あの忌ま忌ましいろばの奴が怒鳴っているってね。そして殴られるのさ。

猫 あ、そうか。君の笑い声は強烈なんだ。

ろば うん。

猫 それで、君、どんな時に笑っただい。

ろば 例えばね、ぼやっとしていてふと可笑しい事が浮かぶんだ。馬なんか可笑しいね。

猫 何が。

ろば 何がって・・・馬鹿なのさ。

猫 失礼な事を聞いていいかな。前から聞きたいと思ってたんだ。

ろば 何だい。

猫 君、どうしてあんなあざみなんか食べられるの？

ろば どうしてって？

猫 そりゃ、草の中には食べられるのはあるよ。だけど、あざみ・・・ありゃカサカサじゃないか。

ろば 平気さ。山葵がきいていて良いんだ。

猫 肉は？

ろば 肉って？

猫 食べたことない？

ろば 肉。ありゃ食べ物じゃないよ、荷物だよ。車にのせて運ぶもんさ。お前馬鹿だなあ。

猫 じゃ、牛乳は？

ろば ああ、あれなら子供の時飲んだ。

猫 楽しい話がありそうだね。

ろば そう。あの頃を思いだすのは楽しい。心がなぐさむよ。母親はやさしかったし、乳は暖かったし。チューチュー吸った。天国だったよ。美味しくて。

猫 しゃぶるのもいいけど、皿にいれても嘗められるしね。

ろば 皿はだめ、嘗めるのだから。

猫 (急に飛びあがる。)聞こえた？

ろば 蹄の音だ。いもり奴。(龍の三種の叫び声。)

龍 ランスロット！(間。)(ランスロット！)

ろば ク、ク。(ろばの笑い声で笑う。)(イ、ヤー。イ、ヤー。イ、ヤー。)

(宮殿の扉が開き、光と煙の中からぼんやり龍の三つの頭、足、光る目、が見え隠れする。)

龍 ランスロット！ 闘いの前にわしのこの姿をたっぷり拝ましてやろう。どこだ、ランスロット。(ヘンリー、広場

に走り登場。駆け回る。ランスロットを捜す。井戸を覗く。
一体あいつはどこだ。

ヘンリー 隠れているのであります、陛下。

龍 ランスロットー……どこだー。(剣の音。)
誰だわしに打ちかかってくる奴は。

ランスロットの声 私だ……ランスロットだ。(一面の
闇。威嚇する叫び。燃え上がる火。ヘンリー、役場に駆け込
む。闘いの音。)

猫 避難しよう。

ろば うん。(二匹、走り退場。広場、群衆で一杯になる。

群衆、異常に静か。空を見上げて囁き合つ。)

男一 なんて長引くんだらう。

男二 うん。もう二分だ。それなのに片がつかない。

男一 もう間もなく終わる筈だがな。

男二 あーあ、穏やかに暮らしていたのになあ……そ
ろ朝飯時なのに、腹が減ってもいない。なんてこつた。あ
あ、今日は、植木屋さん。何だか浮かぬ顔ですね。

植木屋 今日茶の薔薇とワインの薔薇が花を咲かせたん
です。これを見るだけでおなかは一杯になるし、見るだけで
酔うんです。龍様が立ち寄って、是から先の研究費を出して
下さると、約束して下さいました。今や闘いの真つ最中。こ
の恐ろしい戦の為に長年の研究成果も水の泡になって仕舞う
かもしれません。

行商人 (元気な囁き声で。) スモークガラスは如何。
龍様が燻製姿で見えますよ。(皆、声をひそめて笑う。)

男一 こりゃ傑作だ。ハッハッハ。

男二 燻製姿で見えるのか。へーえ。(人々、ガラスを買
う。)

子供 ママ、どうして龍は空いっばいに逃げ廻ってるの。

皆 シーツ。

男一 逃げてるんじゃないんだよ、坊や。あれはね、作戦
上の後退というんだ。

子供 じゃ、どうして尻尾を巻いてるの。

皆 シーツ。

男一 尻尾を巻くのはね、坊や。当初からの予定された作
戦行動なんだよ。

女一 ねえ、考えてもみて。もう丸々六分も続いているの
よ。それなのに終る気配がないわ。みんなあんまり心配なも
んだから牛乳屋だつて牛乳の値段を三倍に吊り上げたわ。

女二 牛乳屋なんて問題にならない。ここへ来る途中でぞつ
とする光景に出会ったわ。死人のように真つ青な顔をした砂
糖とバターが、お店から倉庫に運ばれていたの。ひどく神経
質な食品よ。戦争と聞くとすぐ隠れて仕舞う。(恐れ的叫び
声。群衆、道をあける。シャルルマーニュ、登場。)

シャルルマーニュ 今日、皆さん。(沈黙。)
私が誰だか分からないんですか。

男一 勿論分かりません。昨日の夕方から貴方は全く分か
らない人になったのです。

シャルルマーニュ 何故ですか。

植木屋 恐ろしい人達だ、貴方方親子は。よそものを受け
入れるなんて。龍様の御機嫌を損ねるではありませんか。こ
れは芝生に入るより悪い事です。それなのに何故ですか、だ

なんて。

男一 私に関して言えば、兵隊が貴方の家を取り囲んだ、あの瞬間から貴方が全く誰だか分からなくなりましたね。

シャルルマーニユ そうです。あれは酷い。あの馬鹿な兵隊達は実の娘にさえ会わせて呉れないんです。龍が命じたつて言うんです。エルザには誰も会わせてはならんと。

男一 なるほど。あちらの観点からすれば当然の処置でしょうな。

シャルルマーニユ エルザはたった一人であそこにいます。あの子は明るい顔で窓から私に頷いてくれます。でも、きつと私を安心させる為にああやってくれるんです。ああ、私は身の置き所が無い。

男一 ええっ？ 身の置き所が無い？ じゃ、古文書係員を首に？

シャルルマーニユ そんな事はありません。

男一 じゃ、どんな身の置き所の事を言ってるんです？

シャルルマーニユ 本当に私の言っている事が分からないんですか？

男一 分かりませんね。貴方がよそ者と親しくする様になつてからは貴方の言葉はまるで外国語ですよ。

子供 (空を指差して。) ママ、ママ、龍がひっくり返っちゃった。足を上にしてる。誰かが攻撃しているんだ。火花が飛んでる。

皆 シーツ。(トランペットが響く。ヘンリーと町長、登場。)

町長 命令だ。命令をきくんだ。眼病の予防の為だ。空を

見る事を禁ずる。他に理由はない。眼病の予防の為だ。空で起こった事は必要に応じてコミュニケを発表する。龍様の秘書の口を通じてな。

男一 なるほど。尤もな事。

男二 もうすこし前からこうなっていてもおかしくない。

子供 ママ、龍がやられるのを見るとどうして目に悪いの。

皆 シーツ。(エルザの友人達、登場。)

エルザの友人一 もう十分も続いているわ。このランスロップって言う人、どうして負けないんでしょう。

エルザの友人二 あの人だつて知ってる筈よ。龍には勝てないって。

エルザの友人三 ただ私達をわざと苦しめただけなのよ。

エルザの友人一 私、エルザの所に手袋を忘れて来たの。でももうそんな事どうでもいいわ。この闘い見てたら疲れちゃっ

て、手袋なんか惜しくないわ。

エルザの友人二 私もどうでもよくなつたわ。エル

ザは思い出につて、自分の新しいスリッパを贈るつて言つた

わ。でも私、忘れたわ、こんな事。

エルザの友人三 考えてもみてよ、このよそものがいなかったら、もうとくに龍はエルザを攫(さら)つて行つてるの

よ。そして今頃は私達家で静かにエルザの為に涙を流して居

られたのよ。

行商人 (元気に囁く。) いらんかね。新発明の機械だよ。下を見て空が見える。新式鏡。安くしときますよ。足元で龍

が見える。(皆、声をひそめて笑つ。)

男一 こりゃ傑作だ。ハッハッハ。

男一 足元で龍を見る。いけないね。

(鏡、みるみる内に売れる。皆、三三五五別れて鏡を見る。闘いの音強くなる。)

女一 すごい。

女二 かわいそうな龍。

女一 炎を吐くのを止めちゃったわ。

女二 煙だけよ。吐くのは。

男一 作戦。実に手が混んでいる。

男二 きつと・・・いや、止めと。

男一 わかりませーん。

ヘンリー 町議会コミュニケを発表致します。戦闘は終結しつつあります。敵は剣を失っています。槍は穂先が折れ、空飛ぶ絨毯は、虫が喰って、みるみるうちに飛行能力が低下しつつあります。本拠地から遠く離れている為、ナフタリンを取りに行けず、掌(てのひら)で虫を叩いています。その為操縦能力が著しく削がれています。龍様が敵に止めを刺さないのは単に戦闘に対する龍様の愛着が原因なのです。今までの武功ではあきたらない、ご自分の勇気を發揮し尽くしていない、とお考えのようです。

男一 なるほど、これで合点がいった。

子供 ねえ、ママ、ねえ、見て。本当だよ。誰かに首の所殴られてるよ。

男一 坊や、龍様にはね、首が三つあるんだよ。

子供 ねえ、見て。首、三つともやられてるよ。

男一 坊や、それはね、目の錯覚って言うんだよ。

子供 僕には分かるんだ、どっちが正しいか。僕よく喧嘩

をするからね。誰が勝ってるかは分かるよ。あれ？ どうしたのかな。

男一 子供を連れて行け。

男二 自分の目が信じられない。お医者さん。眼科のお医者さん。

男一 こっちに落ちて来る。これはたまらん。そこどけ。俺にも見せる。

(龍の首、轟音とともに広場に落ちる。)

町長 コミュニケを呉れ。コミュニケを。代わりにこの国をやるぞ。コミュニケを呉れ。

ヘンリー 町議会コミュニケを発表いたします。傷ついたランスロットは、武器を奪われ、部分的には捕らわれの身であります。

子供 部分的ってなーに。

ヘンリー それはね、軍事秘密。捕らわれていない残留部分も組織的抵抗を停止しています。ところで龍様は自分の頭の一つを戦列から外し・・・病気のせいではありますが・・・第一予備役に編入されました。

子供 でも僕には分からないな。だって・・・

男一 こんな易しい事が分からない？ 坊や、歯が抜けた事があるだろっ？

子供 あるよ。

男一 ね。でも坊やはちゃんと生きてるだろっ？

子供 だけど僕、頭が取れた事はないよ。

男一 それがどうしたの。

ヘンリー ニューズ解説を行います。題目。「何故二は、

本質的に、三より大きいか。」証明。二つの頭は二つの首の上にある。故に四である。証明終わり。それに加えて、今度はがっちりくっついていきます。

(龍の第二の頭、轟音と共に広場に落ちる。)

ヘンリー ニューズ解説は新しいコミュニケが入りましたので一時中断致します。コミュニケをお聞き下さい。戦況は、龍様の戦略通りに進展中。

子供 それだけ？

ヘンリー 今の所、これだけ。

男一 龍への尊敬は三分の二だけ減っちゃったなあ。シャルルマーニュ様、おお、親愛なる友人よ、何故貴方は只一人つつ立っていらっしゃるのか。

男二 さ、こちらへ、こちらへ。

男一 娘さんに会わせてくれなかったんだそうですね。なんていう番兵共でしょう。たった一人の娘さんだというのに。ひどい話だ。

男二 何故黙っていらっしゃる。

男一 怒ってらっしゃるんじゃないでしょうね。

シャルルマーニュ いいえ、ただ困ってるんです。最初は私の事が誰だか分からなかった。偽りなしに。私の方は分かっていたんですよ。所が今、今度は、(やつぱり)偽りなしに、ここからわたしを受け入れて下さるうという。

植木屋 シャルルマーニュ様、そつ深く考えてはいけません。深く考えるのは恐ろしい。考えても恐ろしくなりますよ。どんなに時間を失ったか。あの一つ頭のいもりの足に接吻して暮らして来たんですからね。あーあ、素敵な花をいくらで

も育てられたのに。

ヘンリー ニューズ解説の時間です。

植木屋 ひっこめ。沢山だ。

ヘンリー なんだと！ いや、戦時だ。我慢しなければ。で、ニューズ解説。神は一つ、太陽は一つ、月は一つ、陛下の肩の上の頭も一つ。ただ一つの頭を持つ事、是は人間的な、その言葉の最も深淵な意味においてヒューマンなのであります。そればかりでなく、これは戦闘には甚だ好都合。前線を減少させます。三個よりも一個の頭を守る方が三倍楽であります。

(龍の第三の頭が、轟音と共に広場に落ちる。叫び声、爆発する。今度は皆が大声で話す。)

男一 龍、打倒。

男二 俺達は子供の頃から騙されていたんだ。

女一 いいわ、もつ命令を出す人はいないのよ。

女二 私、酔ったみたい。ホント。

子供 ママ、僕もう学校へ行かなくていいんだね。ばんざい。

行商人 おもちゃはいらんかね。芋いもりだよ。「やつ。」とこうする。ほら、もう頭なし。

(皆、大声で笑う。)

植木屋 冴えてるなあ。芋いもりか。さあ、公園で座っていられるぞ、一生涯。仕事に行かないで。ばんざい。

皆 万歳。龍、打倒。じゃがいも龍なんか、あたるを幸い、やつちまえ。

ヘンリー コミュニケを発表します。

皆 そんなもの聞くものか。好きなだけ叫べるんだ。怒鳴りたいだけ怒鳴れるんだ。なんていう幸せ。やっちなまえ。

町長 おい、番兵。

(番兵、走って広場に登場。)

町長(ヘンリーに。)さあ、やれ。始めは下手に出て、その後でどやしつけてやるんだ。気を付け！(皆、シーンとなる。)

ヘンリー (非常に柔らかく。)コミュニケーションを発表致します。前線では全く、まあーったく何も変わった事は起きておりません。総ては全く順調に推移しています。包囲状態は続いているんだ。妙な噂をした者は(威嚇的に。)斬るぞ。首を。金を積んでも無駄だ。もう家に帰れ。番兵、こいつらを追い払うんだ。

(広場、空になる。)

ヘンリー どう、とうちゃん、今の僕。

町長 ちょっと黙ってる。

ヘンリー とうちゃん、なに、にやにやしてるの。

町長 ちょっと黙ってる。

(虚ろな、重い、落ちる音。大地が揺れる。)

町長 水車小屋の向こうだ。今度は胴体が落ちたな。

龍の第一の頭 おい、小僧。

ヘンリー とうちゃん、どうして手をこすってるの。

町長 なあ、ヘンリー。権力だ、権力がひとりでにこの手に転がりこんでさあ。

龍の第二の頭 町長、こっちへ来い。水をくれ。おい、町長。

町長 これ以上は望めんくらいだ。のう、ヘンリー。やっこさん、連中をよく教育して置いて呉れた。手綱を握る者が誰だって、連中は言うことを聞くんだ。

ヘンリー でも、さっきの連中の様子じゃあ。

町長 ああ、あんなもの。どんな犬でも鎖をはなしじゃあ、(一時は)気違いみたいに跳び撥ねる。だがな、また自然に、犬小屋へ帰って行くんだ。

第三の頭 小僧、こっちへ来るんだ。死にそつだ。

ヘンリー で、とうちゃん。ランスロットは怖くないの。

町長 あれは大丈夫。お前だつてまさか、龍がそんなに簡単にやられたとは思っちゃいまい。今時分ランスロットは、空飛ぶ絨毯の上で気を失って、風に吹かれて、この町からは遙か遠くへ流されている筈だ。

ヘンリー でも若し、ひよっこり空から降りて来たらう？

町長 なら好都合。片づければいい。わしが請け合つ。あいつはもう無力だ。わしらの龍殿はなんといつても闘いは上手だった。行こう。最初の命令を出さなきゃならん。(いいか)肝心な事はなーにも起こらんかったつちゅう顔をする事だ。

第一の頭 小僧！ 町長！

町長 さあ行こう、行こう。ぼやぼやしとられんぞ。

(二人、退場。)

第一の頭 ああ、あの左フックがいかなかった。なんで、なんであんな時に左を。右だった。右だったんだ。

第二の頭 おーい、誰かおらんか。おい、ミラー。お前は会つと何時も俺の尻尾にキスしたなあ。おい、フリードリヒセン！ お前は吸い口が三つあるパイプを贈って呉れたなあ。

署名つき。「永遠に貴方の僕（しもべ）。」ってなあ。お前は何処だ。アンナ・マリア・フレデリカ・ペーベル？

お前はわしにほれたって言ったな。胸には俺の鱗をピロイドの袋に入れて掛けていたな。俺達はお互いに分かりあっていた。むかしからだ。そのお前達はいま一体何処にいるんだ。水をくれ。傍に、すぐ傍に、井戸があるじゃないか。一口でいい。いや半口で。いやいや、口を湿すだけでいい。

第一の頭 くそっ。もう一度わしにやらせんか。お前ら一人残らず締め殺してやる。

第二の頭 一滴でいい。誰か。

第三の頭 忠実な家来を一人、たった一人でもいいから、作っておくんだ。しかし素材がなかったな、素材が。

第二の頭 シーツ。誰か傍にいるぞ。その感じがする。こへ来てくれ。水を呉れ。

ランスロットの声 その力もない。

（広場にランスロット、現れる。空飛ぶ絨毯の上に立っている。曲がった剣を杖にしている。両手に隠れ帽子を持ち、足元には楽器がある。）

第一の頭 お前が勝ったが、あれはまぐれだ。あの時右フックにさえしていれば・・・

第二の頭 これがさらばだ。

第三の頭 せめてもの慰めだ。私がお前に残して行くのは、札付きのろくでなしと脱け殻人形、それに死せる魂ばかりなんだから。ああ、これがさらばだ。

第二の頭 傍にいて呉れるのは只一人、この私を殺した人物だとは。人生はこうして終わるものなのか。

三つの頭 （声を揃えて。）これで終わり。さらばだ。（死ぬ。）

ランスロット 奴は死んだ。しかし僕も具合が変だ。手がいうことをきかない。目もよく見えない。ずっと耳に響いている。誰かが僕を呼んでいる。「ランスロット、ランスロット。」と。聞き覚えのある声だ。暗い声。行きたくない。しかし今度はどうやら逃れられそうにない。どうなんだ？僕は死ぬのか？

（楽器、答える。）

ランスロット お前は本当に良い音色をだすね。気品に溢れ、気持ちを高めて呉れる。だけど僕はひどく気分が悪い。もう駄目だ。この傷じゃ。待つてくれ、もつすこし待つて・・・しかし龍が死んだ事を考えると少し胸が軽くなる。エルザ、僕はあいつをやつつけたんだ。だけどもう君とは会えない、エルザ。君の微笑みも、きみのキスも、僕は受けることはないんだ。「ランスロット、どうしたの。どうしてあなた、そんなに暗い顔をしているの。頭がくらくらするの？ 肩が痛むの？ あんなにしつこく誰が貴方を呼んでいるの。」と、君が聞いて呉れる事ももうないんだ。呼んで居るのはね、死神なんだ。死神が僕を呼んでいる。僕は死ぬんだ。悲しいね。なあ？

（楽器、答える。）

ランスロット 残念だ。皆、隠れて出て来ない。この勝利がまるで何か不幸でもあるかのように。死神よ。ちょっと待つて呉れ。お前は僕の事を良く知っている。僕は何度となくお前と出会っている。一度だつてお前を避けた事はない。

だから逃げはしない。聞こえて居るよ。ちょっとでいいんだ。考えさせて呉れ。誰も出て来ない。そういうことだ。でも今は今、家で、少しずつ正気に返って居る。心も素直になってきている。そして自問している。何故、何故、あんないもりを餌をやって、面倒を見たりしてきたんだらうって。俺達の為に今たった一人、寂しく死んでゆく男が居る。これからはもっと賢くならなくちゃ。なんていう闘いだつたんだらう。あそこでランスロットが苦しそうに息をしている。もう沢山だ、沢山だ。自分たちの弱さのせいで、強い人達、心優しい人達、辛抱出来なかつた人達が、犠牲になって死んでいった。石でも、これぐらい分かる。まして俺たちは人間じゃないか。こう皆、囁いているんだ。どの家でも、どの部屋でも。そうだらう？

(楽器 答える。)

ランスロット そう、そういう事なんだ。つまり僕の死は無駄にはならない。犬死じゃないんだ。さようなら、エルザ。生きてたら君の事を生涯愛し続けるのに・・・でも僕には分からなかつたなあ。僕の一生がこんなに早く終わるなんて。さようなら、街よ。さようなら、朝よ、昼よ、夕方よ。後は夜が来るだけだ。ああ、皆さん。死神が呼んでいる。せきたてている。頭がこんがらがってきた。何か、何か、言い残して居ることが・・・ああ、皆さん。怖がらないで。皆さんに出来ること。弱い人たち、みなしご達に親切にする事。お互いにいたわりあう事、これはできる筈。お互いにいたわりあうんだ。そうすれば幸せになれるんだ。嘘じゃない、本当なんだ。本当に、本当。まじりつけないの、この世の中で一番

の本当なんだ。これで終わり。僕はもう行く。さようなら。
(楽器、答える。)

(幕)

第三幕

(豪華な家具の大広間。町長の館の一室。舞台後方、扉の両側に半円形の机。食事に食器が置いてある。それら二つの机の前方、舞台中央に小さい机。その上には分厚い本(後に出てくる慶事記録簿。金色の装丁。)がある。幕があくとオーケストラが響く。町人の一団が叫ぶ。扉を見ながら。)

町人達 (小声で。) 一、二の、三。(声を上げて。)
征服者、万歳。(小声で。) 一、二の、三。(声を上げて。)
我々の為政者、万歳。(小声で。) 一、二の、三。(声を上げて。)
どんなに我々が感謝しているか、言葉では言い尽くせない。(小声で。) 一、二の、三。(声を上げて。)
あ、足音が聞こえる。

(ヘンリー、登場。)

町人達 (声を上げて一斉に。) 万歳、万歳、万歳。

男一 おお、名誉ある我等が自由解放者よ。丁度一年前、あの極悪非道、誅求苛斂、犬畜生の龍の奴を、貴方様が亡ぼして下さいました。

町人達 万歳、万歳、万歳。

男一 それからと言うもの、我々は大変快適に暮らしています。我々は・・・

ヘンリー ちょっと待って、君。「大変」をすこし伸ばして。

男一 分かりました。それからと言うもの、我々はたいへん……

ヘンリー 駄目、駄目。そうじゃなくて、たあーいへん。男一 それからと言うもの、我々はたあーいへん快適に暮らしています。

ヘンリー そうそう。その言いかた。諸君もあの龍征服者の気質はよく知って居るだろう。ナイーブなくらい純真な人なんだ。誠意と実直さをこの上なく愛しておられる。さ、先を続けて。

男一 幸せで、幸せで。体が自然に宙に浮く……

ヘンリー それでいい。待てよ。此処になにかはさんだ方がいいな。人間的で、立派に響く何か良い言葉……龍征服者が氣にいるような……（指をパチンと弾く。）待って、待って、待って、今すぐ思い付くから。うん、そうだ。これだ。これが良い。明るく小鳥も鳴いている。わざわざ去って福がきた。ピーヒョロ、ピーヒョロ、ピーヒョロ。さあ、やって。

男一 明るく小鳥も鳴いている。災い去って福が来た。ピーヒョロ、ピーヒョロ、ピーヒョロ。

ヘンリー 元氣のない鳴き方だな。氣を付けてやらんと、自分で泣く目に会つぞ。

男一 （明るく。）（ピーヒョロ、ピーヒョロ、ピーヒョロ）

ヘンリー よし、よくなった。そんなもんでいいだろう。他の所は練習は済んだのだな。

町人達 はい、済みました、町長様。

ヘンリー よし。もうすぐ龍征服者であらせられる、我が自由の町の大統領閣下がおでましになる。忘れるな、声を合わせて、心暖かく、ヒューマニスティックに、民主主義的にな。儀式が好きだったのは、あの龍の奴だ。だが我々はだ……歩哨（中央の扉から。）氣を付け！ ドア向けドア。廊下に自由の町の大統領閣下のおでまし。（棒読み。低音で。）ああ、大統領様、なんとという大恩人。龍を倒して下さって。なんていう大偉業。

（音楽、轟く。町長登場）

ヘンリー 自由の町の大統領閣下。小生の当直の間、異常なしであります。十名きっかりおります。一人残らずまことに幸せであります。駐在所では……

町長 休め。町長、御苦労。（ヘンリーと握手する。）お？この方々は？ あ？ 町長？

ヘンリー 町の者達であります。丁度一年前、閣下が龍を倒された事を深く心に刻み、お祝いに駆けつけて呉れたのであります。

町長 なんと。これは嬉しい驚き。さあさあ、やって下され。

町人達（小声で。）一、二の、三。（声を上げて。）龍征服者、万歳。（小声で。）一、二の、三。（声を上げて。）我々の為政者、万歳。（牢番、登場。）

牢番 御機嫌うるわしう、閣下。

町長（町人達に。）有り難う、諸君。諸君の言つて呉れようとしている事はみんな分かっている。なんじゃ、この涙は。つい出てしまうた。（涙を拭く。）実は、これから此処

で結婚式だが、わしにはまだやらにやらならん事が残つておる。一旦、出ていてくれんか。式の時にもた呼ぶ。その時に、賑やかにお願いする。悪い夢はもうおしまいじゃ。我々は生きとるんだ。のう？

町人達 万歳、万歳、万歳。

町長 正にそうじゃ。奴隷制度は既に過去のもの。我々は生まれ変わったんじゃ。覚えているな。龍の下でわしが一体何者だったか。病人よ。気違いよ。それが今は？ 胡瓜の様に健康じゃ。諸君の事を言うところんじやない。諸君は何時も、小鳥の様に明るく、幸せだ。さあ飛ぶんだ。生き生きと。ヘンリー、お見送りして。

(町人達、退場。)

町長 さて、どうだ、牢屋の住人達は。

牢番 あい変わらずです、閣下。

町長 それで、わしの昔の相棒はどうだ。

牢番 苦しんでおられる様子で。

町長 ははは。馬鹿を言つな。

牢番 いえ、本当でございます、閣下。

町長 で、どうしている。

牢番 壁によじ登っています。

町長 はは。そうやって少し頭を冷やすのが良いんだ。厭な奴だ、あいつは。わしが笑い話をした。皆、笑つた。あいつだけ笑わん。髭を見せおつた。皮肉のつもりなんだ。この髭と同じぐらい古い話ですな。だから、牢屋に入るような事になる。わしの肖像画は見せたか。

牢番 はい、見せました。

町長 どのやつだ。わしがにっこり微笑んどるやつか。

牢番 それです。

町長 それであいつはどうしている。

牢番 泣いています。

町長 馬鹿を言つな。

牢番 本当です。泣いています。

町長 はは。面白いな。で、あの織工達はどうだ。例の何に、空飛ぶ絨毯を渡したやつらは。

牢番 あいつらにはつんざりです。厭な奴らです。別の階に入れてあるのに、まるで同じ行動です。片方が言う通りの言葉を、もう一人も言つんです。

町長 しかし、二人とも痩せては、きとるんだらう。

牢番 はい、私の牢屋では太れません。

町長 鍛冶屋は？

牢番 また鉄格子をひき切りました。今度は部屋の窓をダイヤモンド製にしておきました。

町長 よろしい。けちけちせんでやれ。それで今はどうだ。

牢番 困っています。

町長 はは。面白いな。

牢番 帽子屋は鼠に帽子を作つてやっています。で、猫が鼠に触ろうともしないんです。

町長 ほう。何故じゃ。

牢番 帽子に見とれて。楽器屋は歌を歌います。これを聞くとき悲しくなります。あいつのところへ行くときは、耳に栓をするんです。

町長 なるほど。町はどうだ。

町長 なるほど。町はどうだ。

町長 なるほど。町はどうだ。

町長 なるほど。町はどうだ。

町長 なるほど。町はどうだ。

町長 なるほど。町はどうだ。

牢番 落ち着いています。でも落書きが。

町長 なんじゃと。

牢番 あちこちの壁に「ラ」と。つまりその、ランスロットのラ。

町長 馬鹿な。「ラクダ」つまり、今の生活が楽だ、と言っておるんじゃ。

牢番 はあ、すると、書いた奴はぶちこまなくても・・・

町長 なにを言うところ。ぶちこむんだ。他には。

牢番 申し上げるのも憚られるようなものでして。その・・・大統領のプタやろう。あいつの息子は悪党だ。大統領は・・・

(ヒヒヒと笑う。低い声で。) ちよっと申し上げかねます。あいつらの書くことといったら。でもほとんどは、「ラ」の字でして・・・

町長 あいつらも変わった奴等だ。だからランスロットに熱を上げやがった。相変わらず何も分かつたらんのか、あいつのことは。

牢番 はあ、全く姿を消して仕舞いました。

町長 鳥は尋問してみたのか。

牢番 はあ。

町長 全員か？

牢番 はあ。耳を見て下さい。この傷、鷲につつかれたんです。

町長 なんと言っとった？

牢番 「ランスロットは見た事ない」。鷲の答えです。そう。おおむだけがハイと。「見た?」「見た」「ランスロット?」「ランスロット」。でもおおむはあめいづ鳥ですから。

町長 蛇は？

牢番 知っていたら、何はさておきやって来る筈です。龍は親戚ですからね。それなのに来ないですから。

町長 魚は？

牢番 何も言いません。

町長 すると、なにか知っているのか。

牢番 いいえ、魚博士が目を見て保証しました。この魚はなにも知ってはいない。一言で言いますと、詰まり、このランスロット、セント・ジョージ、ベルセウス、素戔嗚尊(す

さのおのみこと)、各国で色々に呼ばれて居る、この男の行方は・・・知れない、と言つこと。

町長 あいつめ。悪魔に喰われる。(ヘンリー、登場)

ヘンリー 幸せな花嫁の父親、古文書係員のシャルルマーニユ氏が来ました。

町長 ほう、ほう、待っていたところだ。通せ。(シャルルマーニユ、登場)

町長 牢番、下がって良い。また精勤に励んで呉れ。お前の働きに満足している。

牢番 努力致します。

町長 そうして呉れ。シャルルマーニユ、この牢番を知っているか。

シャルルマーニユ いいえ、大統領様

町長 そうか、まあよい。ひよっとするとそのうち厭でも知るようになる。

牢番 引つ立てますか。

町長 早まるな。それがお前の悪い癖だ。今は下がって良
い。

(牢番、退場)

町長 のう、シャルルマーニユ。お前にはおよそ察しは
ついておろう。何故お前を呼んだか。いろいろ面倒事、執務
があつて、親しく挨拶にも行けなかつたが、分かつているな、
今日がエルザの結婚式だつちゆう事は。町中ふれが貼つて有
るからろう。

シャルルマーニユ はい、分かつております、大統領様。

町長 我々国家の僕は、溜め息をついたり、花を捧げたりし
て求婚は出来ん。求めるんではなく、命令でいく。それも超
然としてな。ははは。これはまあ、便利も便利だ。エルザは
幸せか？

シャルルマーニユ いいえ。

町長 おい、おい、そんな返事はない。勿論幸せだ。お前
は？

シャルルマーニユ 絶望です、大統領様。

町長 なんとという恩知らずめ。わしが龍を倒したんだぞ。

シャルルマーニユ お許し下さい、大統領様。しかし、ど
うしても信じられませんので。

町長 信じられる！

シャルルマーニユ 本当に信じられませんので。

町長 られる、られる。このわしでさえ信じられるのだ。
お前に信じられん訳がない。

シャルルマーニユ いいえ。

ヘンリー ただ信じたくないだけです。

町長 信じたくない？

ヘンリー 取引です。値段を吊り上げているんです。

町長 分かつた。わしの第一補佐の役を与えるがどつだ。

シャルルマーニユ 厭です。

町長 馬鹿な。いいだろつ。

シャルルマーニユ いいえ。

町長 駆け引きは止めてくれ、時間がない。よし、公園の
傍の市場から近い宮廷を与える。百五十三部屋つき。窓はみ
な南向きだぞ。莫大な俸給もだそう。それから俸給の他に、
役所に行く度に出張手当て、家に居る度に在宅手当て。これ
じゃわしと同じぐらい金持ちになるな。これで全部。これな
らよかるう。

シャルルマーニユ いいえ。

町長 これでまだ不足なのか。

シャルルマーニユ ただ一つの事が望みなのです。私達を
そつとして置いて下さい。これです、大統領様。

町長 そつとしておいて呉れ？ 御立派な。しかし、わし
がそつとして置きたくなかつたら？ それに国家的見地から
見るとだな。これは健全な考えなんだ。龍征服者がおのれの
腕で救つた娘と結婚するんだからな。誰でも納得する考えだ。
お前にはどうして分からんのだ。

シャルルマーニユ 何故私達をこつ苦しめるのですか。私
は自分で考える事が出来る様になりました、大統領様。それ
だけでも辛いです。なのに又この結婚です。氣違ひになつ
ても可笑しくありません。

町長 馬鹿な、馬鹿な。氣違ひだと？ そんなものは全部

うそつぱち。つくりごとだ。

シャルルマーニユ ああ、なんて私達は無力なんでしょう。私達のこの町は、以前と全く同じように静かで、おとなしい。何の変わりもない。それが恐ろしい。

町長 なんと言う戯言（たわごと）だ。何故それが恐ろしい。自分の娘とぐるになつて、反乱でも起こす気か。

シャルルマーニユ いいえ。今日、二人で森へ行つたところです。よおく話しあいました。詳しく考えてみました。明日娘がいなくなつたら、その後私も死ぬのです。

町長 娘がいなくなつたら？ なんていうアホな話だ。

シャルルマーニユ 娘がこんな結婚の後おめおめと生きていましようか。

町長 勿論生きている。名誉ある、楽しい式になるんだ。他の男なら大喜びだ。娘を金持ちに嫁がせるんだからな。

ヘンリー この人だつて喜んでるんですよ。

シャルルマーニユ いいえ、私はもう年寄りで乱暴な言葉は似合いません。こんな事を面と向かつて申し上げるのは辛いのですが、でもやはり言います。この結婚は私共にとつて大変な不幸です。

ヘンリー 取引もこう粘られては疲れるなあ。

町長 ほどほどにしておくんだな、シャルルマーニユ。さつき申し出た金額以上はびた一文だせん。どうやらわしらの分捕りの分け前を取ろうという腹だな。それはやれん。あの籠が厚かましくも握つて居た財産は、今はこの町の錚々たる人物の手にあるのだ。錚々たる人物、まあ即ち、わしと息子のヘンリーの二人だが。これは適法。完全に適法だ。此処か

らは一銭も出さん！

シャルルマーニユ 下がつて宜しいでしょうか、大統領様。

町長 許す。だがな。これから言う事はよく覚えておけ。

第一。式場では明るく、楽しそうに、生き生きと振る舞う。

第二。死ぬのは許さん。わしの都合の悪い限り、死なせはせん。

娘にもこの事は言つておけ。第三。これからはわしの事を「閣下」と呼ぶんだ。それから、ここに名簿がある。五十

人の名前がある。皆、お前の友達だ。お前に変な動きがあれば、この人質五十人は行方不明になる。行つてよい。待て。

すぐ後から馬車を送る。娘を連れて来るんだ。変な気を起こすなよ。行け。

（シャルルマーニユ、退場）

町長 ふん、なかなか上手く運んどる。

ヘンリー 牢番の報告は？ とうちゃん。

町長 天気晴朗にして風もなしじゃ。

ヘンリー 「ラ」の落書きは？

町長 龍の時代にも落書きは普通だった。書かせておけ。それで気がすむんだ。何の害もありはせんし。ちよつと見て

くれんか。その椅子はあいとるか？

ヘンリー ええっ？ ああ。（椅子に触れる。）あいてるよ。坐れる。

町長 笑うな。なにしろ隠れ帽子だ。何処にいるか知れたもんじゃない。

ヘンリー とうちゃんにはまだ分からないのか、あの男が。

あいつは頭のとっぺんから足の爪先まで騎士道さ。家に入る時だつて帽子は必ず脱ぐ。だから門番があいつをすぐ逮捕す

る。

町長 あれから一年経つ。あいつの根性も悪擦れしとるかもしれん。(坐る。)ああ、そう、ヘンリー、ヘンリーちゃん。これからお前と仕事の話をやるとしよう。ヘンリーちゃんには貸しがあった。借金を返して貰わにや。

ヘンリー 借金だつて？ とうちゃん。

町長 そう。わしのお供三人を買収したのう。わしの尾行、秘密書類の盗み読み。いろいろやつて呉れる。

ヘンリー とうちゃん。どうして僕がそんな事・・・

町長 まあ待て、まだわしが物を言うとする最中だ。わしはあいつらに五百ターレル余分にやつておいた。わしが許可した情報だけを、お前に知らせるようにな。だから、お前はわしに、五百ターレルの借りがあるんじや。

ヘンリー 言い難いんだけど、とうちゃん。ぼく、それを知つて、また六百ターレルはりこんだんだ。

町長 分かつとる、分かつとる。それでまたこつちは、千ターレル上乘せしたんだ。だからのう。差引きやはりわしがお前に貸しとる事になる。もうあいつらに値上げするのは止めにせい。あんな高給を取つてな、連中ぶくぶく太つて墮落してきおる。無愛想にはなるし。そのうち飼い主に噛みついてくるぞ。もつ一つ。わしの(私設)秘書に煩く付きまとわんでくれ。かわいそうに。精神病院行きた。

ヘンリー まさか。どうして？

町長 わしとお前とが、一日に何度も代わりばんこにあいつを買収するもんだから、何が何だか分からなくなつたんだ。わしにわしの事を密告しおる。自分の秘書の地位を騙し取る

うと、自分の事を讒言しおる。真面目で勤勉な奴なのに。あいつが悩むのを見るのはかわいそうでな。明日二人で病院に行つてやるう。そこではつきりさせてやるうじやないか、結局のところ、あいつが誰に仕えているのか。いやはやヘンリーちゃん、なかなかやるな。こいつとうちゃんの地位を狙いやがつて。

ヘンリー それはないよ、とうちゃん。

町長 いいじゃないか、ヘンリーちゃん。これが浮世だ。まあわしの提案を聞いてくれ。尾行はのう、これからは、本人でやる事にしよう。これが肉親同志でやるやり方だ。親父と息子、水いらず。これなら金も溜まるし。

ヘンリー こんな時に金の話するなんて、とうちゃんもひどいよ。

町長 そう、そう。地獄の沙汰も金次第なんて言つたつて、あの世まで金は持つて行けんからな。

(蹄の音。鈴の音。町長、窓に掛け寄る。)

町長 来た、来た。わしのかわい子ちゃんが来た。キラキラ、ピカピカの馬車。この世のものとは思えん。龍の鱗で飾られて。それにエルザ、ステキー、ステキの上にまたステキ。全身ピロード。いやいや、何といても、権力ちゆうものは有りがたいものじゃ・・・(囁く。)あいつから、あれこれ聞き出すんだ。

ヘンリー あいつ？

町長 かわい子ちゃんからよ。最近ひどく無口になりおつた。あいつ(周囲を見回して。)例のランスロットの行方を知つているのかもしれない。訊問しろ。だが用心してな。わし

はカーテンの後ろから盗み聞きじゃ。(隠れる。)

(エルザとシャルルマーニユ、登場。)

ヘンリー エルザ、おめでとう。君、日毎に美しくなっていくね。なかなかいいじゃない。大統領閣下は今着替え中。ちよつと失礼する、とのこと。まあ此処に坐つて、エルザ。

(町長が隠れているカーテンの前にある椅子に坐らせる。シャルルマーニユに。) あんたはあつちの部屋で待つていて。

(シャルルマーニユ、お辞儀をして去る。)

ヘンリー 大統領が礼服に着替える為に出て行つて呉れて僕は嬉しいよ、エルザ。大分前から君と二人だけで話したかつたんだ。友達としてね。気持ちの底を打ち明けあつて。君、どうして黙つてるの? え? 答えたくないの? 僕はね、自分なりに君が好きなんだ。何か言つて呉れよ。

エルザ 何を?

ヘンリー 何でもいいさ。

エルザ 私・・・何もないわ。

ヘンリー そんな事つてないだろつ? 今日は結婚式じゃないか。ああ、エルザ・・・今度もまた僕、君を諦める事になつちやつたなあ。だけど龍征服者はやつぱり龍征服者だからなあ。僕はひねくれ者だよ。だけど龍征服者には尊敬の気持ちを抱いているんだ。君、聞いてないの?

エルザ ええ。

ヘンリー ああ、エルザ・・・まさか僕と君、全く赤の他人になつたんじゃないだろつね。僕たち、子供の時あんなに仲がよかつた。覚えてるだろつ? 君が麻疹(はしか)に罹つて、僕、何度も何度も、君の窓辺に行つたり来たり。ついに

僕も麻疹に罹つちやつた。そしたら君、僕の家に来て呉れた。そして泣いて呉れた。僕が優しいつて。僕がかわいそうつて覚えてる?

エルザ ええ。

ヘンリー あんなに仲の良かった二人の子供、それが急に死んで仕舞うものだろつか。僕の心にそして君の心に、あの子供はもう残つて居ないのか。過ぎ去つた昔に返つて、兄と妹の様に、幼な友達として話そうじゃないか。

エルザ ええ、いいわ、話しましょう。

(町長、カーテンから顔を出し、音を立てずにヘンリーに拍手する。)

エルザ 貴方、知りたいのね、私が何故ずつとおし黙つて

いるか。

(町長、大きく頷く。)

エルザ 私、怖いからなの。

ヘンリー 誰が。

エルザ 皆が。

ヘンリー ええつ? 誰かはつきり言えよ、怖い人を。そいつらを暗い所にぶち込んでやる。そうすりやすく楽になるさ。

(町長、手帳を取り出す。)

ヘンリー さあ、名前は?

エルザ 駄目よ、ヘンリー、そんな事しても無駄。

ヘンリー 無駄つて事はないよ。保証する。僕、実験済さ。よく眠れるようにはなるし、食欲は回復するし、気分もよくなる。

エルザ そうね。なんて言ったら分かって貰えるかしら・・・私・・・怖い、みーんなが、こわいの。

ヘンリー ああ、そうか。分かる。よくわかる。みーんなが怖い。僕もその中に入ってるんだ。君には怖いんだ、この僕も、だろ？ ひよっとすると、僕の事情用してないんだ。でも、僕だつて奴らが怖い。僕は親父も怖いんだよ。

(町長、理解出来ぬという表情で両手を広げ、肩を窄める。)

ヘンリー 自分の使っている召使だつて怖い。だから連中を怖がらせる為に、残酷な顔をするんだ。あーあ、こんな風に自分のはった蜘蛛の巣に、自分で引つ掛かつて、何が何だか分からなくなってるんだ。エルザ、何か言つて呉れよ。黙つてないで。

(町長、そうそう、という様に、頷く。)

エルザ まだ言つことあるかしら・・・私、最初は腹が立つたわ。それから悲しくなつた。その後はどうでもよくなつた。今は私、おとなしいの。今までにないくらい素直。もう人にどうされてもいいの。

(町長、大きくヒヒヒと笑う。自分で驚き、カーテンの後ろに隠れる。エルザ、見回す。)

エルザ 誰？

ヘンリー 気にしない、気にしない。結婚式の宴会の準備をしているんだ。ああ、僕のエルザ、かわいそうなエルザ、なんて残念なんだ、あのランスロットがいなくなつたのは。跡形もなく消えて仕舞つた。今になってやっとあいつの事が分かつてきたんだ。あれは驚くべき男だつた。立派だつた。それなのにみんなで彼には申し訳ない事をしてしまった。も

う彼が帰つて来るといふ望みは、全くないのか。

(町長、再びカーテンから這い出す。からだ中を耳にして聴く。)

エルザ あの人・・・帰つて来ないわ。

ヘンリー そんな風に思つてはいけないよ。何故か、僕にはまた彼に会えるぞつて気がするんだ。

エルザ ありえないわ。

ヘンリー 僕を信じるんだ。

エルザ 嬉しいわ、わたし。そう言つて下さるの。でも・・・誰か聞いてない？

(町長、椅子の背の後ろにつづくまる。)

ヘンリー 勿論、誰もいないさ。今日は休日、スパイも休み。

エルザ ねえ、ヘンリー、私、ランスロットがどうなつたか知ってるの。

ヘンリー 駄目。言つちや駄目。言つての辛いんだらう？

(町長、拳骨で脅す。)

エルザ いいえ。私、黙つてたの。あまり長い間黙つてたので、いまみんな話しちゃいたくなつたわ。どうせ誰にも分かりはしない。あれがどんなに悲しい事か。悲しいのは私だけ。そう思つていたの・・・そんな町に生まれたのね、私。

でも、今日はこんなに熱心に聴いて下さるんですもの・・・かいつまんで・・・丁度一年前、闘いが終わろうとする時、

猫が宮殿の広場へ見に行ったの。そしたら、死んだ龍の頭の傍に死に神の様に真つ青な顔をしたランスロットが立つていた。剣を杖にして微笑んだ。猫を悲しませない為よ。猫

は私の所へ助けを呼びにきたわ。でも歩哨が、それは厳しいの。蠅一匹入るすきもないの。私の家に入れずに、猫は追っ払われたわ。

ヘンリー ひどい奴等だ。

エルザ それで猫は知り合いのろばを呼んだの。ろばの背に、傷ついたあの人を乗せて、人目につかない様にこっそりこの町から運び出したの。

ヘンリー でも、どうして。

エルザ だってあの人、ひどく弱ってたでしょう。町の人に殺されちゃうかもしれないでしょう？ 猫達は小道を通じて、山に入ったの。猫はずっとあの人の方に坐って心臓が鼓動しているかどうか、聴いていたの。

ヘンリー 勿論、打っていたんだろ？

エルザ ええ、でもだんだん弱くなってきたの。「とまれ」って、猫は叫んだ。ろばは止まったわ。夜になって居たの。山を随分高く、もう登って来ていたの。回りはとても静かで、とても寒かった。猫が言ったわ。「家へ帰ろう、もう町の人だって、ランスロットをいじめないよ。エルザに一目会わせよう。その後で二人でお墓にいれるんだ。」って。

ヘンリー 死んだんだ、ランスロットは。かわいそうに。エルザ そう。死んだの。ろばは頑固者だから、帰らないって言った。そしてそのまま先に進んだの。猫は帰った。猫は家に居つくって言うでしょう。帰って来て、私に何もかも話してくれた。だから、今ではもう誰も待つ人はいないの。みんなおしまい。

町長 万歳！ みんなおしまい。（踊る。部屋を踊り廻る。）

みんなおしまい。わしは総てに君臨するんじや。もう誰も怖い奴はおらんぞ。有り難う、エルザ。今日はめでたい。実にめでたい。龍を殺したのはわしじゃない、なんて言う奴はもう何処にもおらんのだ、のう？

エルザ あの人、盗み聞きしていたの？

ヘンリー あたりまえさ。

エルザ 貴方もそれを知って居たの？

ヘンリー おいおい、かまととは止めようぜ。今日結婚しようといういい娘さんなんだから。

エルザ パバ、パバ。

（シャルルマーニュ、登場。）

シャルルマーニュ ああ、エルザ、どうしたんだい。（抱き締めようとする。）

町長 気をつけ！ わしの許嫁に対して気をつけ！

シャルルマーニュ （気をつけをして。）よし、よし。落ちて着いて。泣かないで。どうしようもない。どうする事も出来ないよ、エルザ。どうする事もできないよ。

（音楽、轟く。）

町長 （窓に駆け寄る。）おお、素晴らしい。楽しいぞ。客達が祝いにやって来た。馬にはリボンを付けて。舵棒には提灯をつけて。この世に生きるとは何と素晴らしい事だ。邪魔者は誰もいない事が分かると、その喜びも一段と増すわい。エルザ、笑顔だ。ピッター予定通り、一秒も遅わず、自由の町の大統領御自身がお前を抱擁するんじや。

（扉が大きく開く。）

町長 よくいらっしやいました、皆さん。よくいらっしや

いました。

(客達、登場。夫婦あいたがい、エルザと町長の傍を通り過ぎる。その時上品にほとんど囁き声で挨拶。)

男一 御婚約おめでとうございます。皆、心よりお喜び申しあげます。

男二 家毎に提灯を吊つて、祝つています。

男一 通りは、真昼の様に明るい。

男二 酒屋という酒屋は人で一杯。

子供 皆、怒鳴ったり、殴り合つたりだよ。

客達 シーツ。

植木屋 釣鐘水仙を持ってまいりました。お気に召せば嬉しいのですが。確かに少し悲しい音がするんですが、それほどひどくはありません。それに朝には萎んで静かになります。

エルザの友人一 可愛いエルザ、もつと元氣を出して。でないと私、涙が出てきちゃう。そしたらつげまっげ、駄目になっちゃうわ。今日はこんなにうまく付いたのに。

エルザの友人二 だつてあの人、龍よりはましよ。あの人、手も足もあるし、鱗はないもの。明日必ずお話してね。わくわくして待つてるわ。

エルザの友人三 貴方、みんなに好い事して上げられるのよ。だつて例えばあの人に頼む事出来るでしょう。うちのパパの上役を首にする事。そしたらパパ、その上役の地位にくくでしょう。お給料、倍になるわ。そしたら、幸せになれるわ。

町長 (一人言で客の数を数える。)(一、二、三、四、(次に、食器を数える。)(一、二、三、四、えーと、どうや

ら、人の方が一人多いようだな。あ、そうか、子供だ。そんなに泣かんでいい。ママと一緒に皿で食べなさい。さあ、全員揃つてるな。席について。控え目に素早く、結婚式はさせて、あとは披露宴。魚を手に入れておいた。人に食べて貰いたいという魚だ。料理されている時に嬉しうて笑つておつた。それに出来上がったら、「はい、出来上がり。」とコックに知らせるし。これは七面鳥。自分の雛が詰めものになつておる。心暖まる家庭愛。こつちは豚。ただ喰わされ太らされたつていう代物じゃない。この披露宴の為に特別に教育を受けたのだ。丸焼きにされていても、自分で動いてサーブスだ。ほら、握手の為に人にお手々を差し延べる。キヤーなんて言わないで、坊や。怖がる事ではない。面白いだろう。これは葡萄酒。年代物じゃ。瓶の中で子供の様に撥ねおる。こつちはウオツカ。蒸留が完璧で瓶が空っぽに見えるだろう?あれ? 本当に空っぽだ。召使のやつら奴、飲みやがったな。まあいい。まだいくらでもある。諸君、金持ちと言つものはいいものだ。皆、席に付いたかの? よろしい。いやいや、食べるのはまだ早い。今から結婚式だ。ちよつと待て。エルザ、お手。(エルザ、町長に手を差し出す。)可愛いのう。悪戯つこじや、お前は。なんと暖かいお手々じゃ。顔を上げて。笑つて。ヘンリー、用意はいいか?

ヘンリー はい、大統領様。

町長 始める。

ヘンリー エー、皆さん。私は口べたで、話があちこちするかも知れませんが、お許しを頂きたい。丁度一年前、あの自惚れたペテン師、皆さんもよく御存知のあの男が、龍に

闘いを挑みました。町議会議員で構成された我が特別調査委員会は、この闘いにつき（調査し）次の結論を下しました。即ち、あの殺されたベテン師は、単に龍を誘い、怒らせただけで、龍に手傷さえ負わせる事はできなかった。その時我等が自由の町の大統領、当時の町長殿が、勇敢にも龍にとびかかり、龍を倒した。ありとあらゆる勇氣の手本を示し龍に止めを刺したのであります。（拍手。）憎むべき奴隷制度の陋習（ろうしゅう）は根底から覆され、我等が町に自由の灯がともったのであります。（拍手。）これに感謝したわが町は次の決定を下しました。我々は毎年あの忌まわしい龍に、この町の最も素晴らしい娘を供物に捧げてきた。ならばこの町の救い主にその当然の権利を拒否する理由が我々にあるだろうか。（拍手。）そこで、片や大統領の偉大さを称える為に、片や我々の心からの帰依を示す為に、私、自由の町の町長は、今ここで厳かに、二人の結婚を宣告致します。オルガン！結婚の讃歌を！（オルガン、響く。）書記！慶事記録簿を！（書記達、各自、巨大な万年筆を持って登場。）四百年もの間、この記録簿には龍の生け贄となつた哀れな娘達の名前が記入されてきました。四百頁がかわいそうな娘の名で埋められ、今回、四百一頁目に始めて、幸せな娘の名が記入されるのです。我々の勇者、龍征服者が、その娘を妻にするのであります。（拍手。）汝、龍征服者よ、良心に照らして、真実を答えなさい。汝はこの娘を妻として娶るや。

町長 生まれ故郷の為とあらば、たとえ火の中、水の中。（拍手。）

ヘンリー さあ、書記、記入するんだ。注意してやらんか。

しみでもつけてみる。舐めて拭き取らせるぞ。よーし。よーし。これでいいと。ああ、これは失策。ちよつとした手続きが、もう一つ残っていた。汝、娘よ、汝はこの町の大統領様の妻となるな？（間。）さあ、エルザちゃん。答えて。いいんだね。

エルザ いいえ。

ヘンリー これでよしと。書くんだ、書記。娘は同意した。

エルザ 書いたら許しませんよ。

（書記達、跳び退く。）

ヘンリー エルザちゃん、邪魔しないでね。

町長 いやいや、邪魔なんぞしておりせん。娘が「いや」つちゅうのは、「いいわ」つちゅう事じゃ。書記！書くんだ！

エルザ 書いてもらんなさい。その頁を引き裂いて、踏み潰します。

町長 若い娘の躊躇（ためらい）。いいもんだ。涙ポタポタ、ああだこうだのいつもの話、片づく前に娘は泣くもんだ。

だが、片ついて仕舞えば、後はおとなしくなるんじゃ。幸せになる。さ、こうやって両手を抑えている。やることをやるんだ。書記！

エルザ 一言だけ言わせて下さい。お願い！

ヘンリー エルザ！

町長 怒鳴るんじやない、ヘンリー。総て予定通りだ。娘は一言言いたいんだ。一言喋らせる。それで公の部分はお終いだ。心配せんでいい。やらせる。どうせここに居るのは味方だけだ。

エルザ 皆さん、私の親しい皆さん。どうして皆さんは私

をこんなに苦しめるの？ 恐ろしい。夢にうなされていたい。悪者が刀を持って追い駆けて来るとします。でも助かる方法があるかも知れません。その悪者をやつつけるとか、うまく逃げおおせるとか・・・でも、もし刀が、誰の手も借りずに、刀自身が襲い掛かってきたら？ 縄が自分で蛇の様に、私達の手や足を縛りつけようと這ってきたら？ もし窓のカーテンが、あの静かに掛かっているカーテンが、口に猿ぐつわを噛ませようと、自分で襲い掛かってきたら？ 皆さんはその時どう思うでしょう。私は思っていたわ。皆さんが龍の言うことを素直にきいていたのは、刀が悪者の言う事をきいていると同じだって。皆さんはただ刀なんだって。そう思っていたんです。ああ、その悪者、それは皆さんだわ。私には分かったの。皆さんが実は悪者なの。でも皆さんを非難はしません。皆さんは、そういう事に気が付いて居ないのです。でも、お願い。目を覚まして！ まさか龍が本当には死んでいなくて、昔よくやった様に、人に姿を変えているんじゃないでしょうね。それなら龍は今度は大勢の人に姿を変えたんです。そして今私を殺そうとしている。殺さないで！

目を覚まして！ ああ、なんて悲しいんでしょう。蜘蛛の巣を切り払って！ 皆さん、皆さんは蜘蛛の巣で動けなくなっているのよ。本当に私を助けて呉れる人、誰もいないの？

子供 僕がいるよ。だけどママが僕の手を放さないんだ。

町長 さあ、これで終わり。娘の「一言」は終わった。何事も起こらず、すべて世は事もなしだ。

子供 ママ！

町長 静かに、坊や。すべてこの世に事もなし、と。陽気

に、陽気にやろう、ヘンリー。もうお役所の杓子定規は沢山だ。そこに書いてくれ。「結婚式は滞りなく執り行われた。」と。それからもう食事だ。ハラペコになりおった。

ヘンリー 書記、書くんだ。「結婚式は滞りなく執り行われた」と。さあ、早く。何をばやっとしとる。

(書記達、ペンをとる。扉に大きなノックの音。書記達、パツと飛び退く。)

町長 誰だ。(答えなし。)おい、誰か知らんがあしただ、あした。ちゃんと秘書を通して、面会時間にしてくれ。今は忙しい。結婚式の真つ最中だ。(再びノック。)扉を開けるな！ 書記、書くんだ。(扉、ひとりでに開く。扉の後ろには誰もいない。)ヘンリー、助けてくれ。これはどういう事だ。

ヘンリー ああ、お父さん、何時もの話だよ。今のエルザの哀れな訴えが、川や、森や、湖の、例の住民達を心配させたのさ。家の精の荒神様は屋根裏から這って来るし、井戸の中からは水の精・・・だけどやらせておけばいいんだ。あいつらには何も出来はしない。良心とかその類(たぐい)と同じさ。目に見えなくて力が無い。そりゃ二三度恐ろしい夢は見るかも知れないけど、それだけの事さ。

町長 いや、あいつだ。

ヘンリー あいつ？

町長 ランスロット。隠れ帽子だ。傍に立っていて話を聴いとるんだ。わしの頭の上には奴の刀が振り翳されて・・・

ヘンリー お父さん！ 正気に返らないと、僕が権力を握って仕舞うよ。

町長 (間) 音楽だ! 陽気に! わーっと! うろたえてしもうて失礼した。どうも隙間風が苦手だな。隙間風が扉をあけた。それだけの事だ。エルザちゃん、落ち着くんだ。結婚式は滞りなく執り行われた。わしはこう宣言する。あれは何だ。誰だ、走って来るのは。

(従僕一、慌てふためいて、走り登場)

従僕一 返します。もういりません。返します。

町長 何を返すのだ。

従僕一 お金です。頂いた忌まわしいお金。もう貴方に仕えるのは止めました。

町長 どうして。

従僕一 殺されます。今までの悪事のせいで。(走り去る)

町長 誰に殺されるんだ。ええ? ヘンリー。

(従僕二、走り登場)

従僕二 廊下の所まで来た! 腰を九十度も曲げてお辞儀したのに、見向きもしてくれない。もうあの人は町の人を相手にしません。ああ、仕返しがかかるぞ。仕返しが。(走り去る)

町長 ヘンリー!

ヘンリー 平然と。腰をすえて。どんな事が起こっても。助かるただ一つの道です。

(従僕三、後ずさりしながら登場。見えないところに向かつて叫ぶ。)

従僕三 証人も居る。女房に聞いてくれ。俺の言う通りだつて分かるから。何時だって俺は奴等の遣り口を非難してきたんだ。確かに奴等から金は受け取った。受け取ったけど、あ

の時はノイローゼだったんです。その証拠をお見せします。(退場)

町長 見たか、あれを。

ヘンリー 平然と、平然と。どんな事が起こっても。

(ランスロット、登場)

町長 ああ、これはこれは、思いがけない。しかしまあ、ようこそ。取り皿が足りんようだが、気になさるお方でもあるまい。そちらは深い皿でお召し上がり下され。わしは浅い皿にしよう。皿を持って来いと召使に言う所だが。あの馬鹿者共奴がちりじりに逃げおつて……そう言えばわしらは今結婚式の真つ最中で。つまりその……へへへへ、つまり、所謂、プライバシー。個人と個人のおれですよ。ほのぼのとしたいいものじゃ。どうかお近づきになつて下され。客達は一体何処じゃ。ああ、何か落として、机の下を捜しているんだな。これが息子のヘンリー。以前お近づきになつた事がありましたな。まだ若いが、もう町長。大変な出世だ。それと一つのもわしが……いや、あんたとわしが……いや龍が倒されたからじゃ。おや、どうされたかの。どうぞお入り下され。

ヘンリー どうして黙ってるの?

町長 本当にどうなされた。旅は如何でしたか。何か新しいニュースはありますか。お疲れですか。それではどうかおやすみ下さい。守衛に案内させますから。

ランスロット 元気がい、エルザ。

エルザ ランスロット! (駆け寄る。) 坐つて。どうぞ、坐つて。本当に貴方なの?

ランスロット そう。僕だ。

エルザ 手も暖かそう。あわない内に髪が少し伸びた感じ。それともそう見えるだけかしら。マントも以前と同じね。ランスロット！（中央の小さな机に座らせる。）葡萄酒を飲んで。いえやめて。あの人達のものには、触るのだから厭だわね。一休みして頂戴。それから町を出て行きましよう。パパ！

あの人、帰って来た。パパ！ 丁度あの時と同じだわ。あの時も出口はただ一つ。もう死ぬほかないと二人で思った時だったわね。ランスロット！

ランスロット じゃ、君、僕の事をまだ思っていて呉れているんだね。

エルザ パパ、聞いた？ 何度パパと二人で夢見た事でしよう。あの人が帰ってきて、尋ねて下さる。「君、僕の事をまだ思ってくれているんだね」って。すると私、答えるの、「ええ、ランスロット」って。そして次に私がかきくの。「何処にいらしたの、今まで」って。

ランスロット ここからずっと遠くのある尊い山に。

エルザ 重傷だったの？

ランスロット そう。ひどく傷ついて、命が危なかった。

エルザ 看病は誰が？

ランスロット ある樵（きこり）のおかみさんだ。やさしい親切な人でね。ただ諺言でその人の事をエルザ、エルザって言うもんだから、怒っちゃってね。

エルザ じゃ、私が居なくて、悲しかったのね。

ランスロット うん。

エルザ 私、もっと悲しかったわ。だって此処ではいじめ

られ続けですもの。

町長 誰が。そんな馬鹿な。すぐ言うてくれれば良かったんだ。そんな奴はすぐぶち込んでやったのに。

ランスロット 僕はみんな知ってるんだよ、エルザ。

エルザ 本当？

ランスロット うん。

エルザ どうして知っているの？

ランスロット その山の中に洞窟があるんだ。樵の小屋からあまり離れてはいない所にね。この洞窟の中に、（前にも言ったね）帳面、苦情帳があるんだ。最初から終わりの頁まで苦情で一杯さ。誰もそれに触る人はいないけど、一頁、一頁と書き込みが増えていく。それも毎日。誰が書くのか。世界が書くんだけ。世界中のありとあらゆる犯罪で、虐げられて浮かばれない人達の不幸で、一杯なんだ。

（ヘンリーと町長、抜き足差し足で、扉の方へ向かう。）

エルザ で、私達の事も、あったの？

ランスロット あった。おい、お前達、人殺し、そこを動くな！

町長 えらい厳しい言葉じゃな。

ランスロット 一年前の私とは違うんだ。お前を助けてやったのに、お前のした事は一体何だ。

町長 はあ、さようか。わしのした事に不満で。なら、辞職致しますて、出て行くまで。

ランスロット 出てなど行かせんぞ！

ヘンリー 賛成、賛成。貴方が此処に居なかった時どんなに酷い事をしたか、想像も出来ない程ですよ。彼の犯罪リス

トをお目にかげられますよ。これはまだ苦情帳には載っていません。まだ計画の段階ですから。

ランスロット 黙れ！

ヘンリー しかしですね。もし、よく調べて下されば、僕は個人的には何も悪い事をしていない事が分かりますよ。ただ指図されただけだったって事が。

ランスロット 誰だつて指図されたさ。何故お前が指図された者のなかのチャンピオンになったんだ。この犬畜主め。

ヘンリー 出よう、パパ。怒鳴り出した。

ランスロット 出させはしない。エルザ、僕はひと月前から帰って来ていたんだ。

エルザ 私の所には来て下さらなかったのね。

ランスロット 行った。隠れ帽子を被って、朝早く。君が目を覚まさないようにそっとキスしたのさ。それから町を散歩した。ひどいものだったよ、僕が見たのは。読んだだけでもひどかったけど、この目で見るのは尚更だ。おい、ミラー。

(男一、机の下から立ち上がる。)

ランスロット 僕は見たぞ。お前が嬉し泣きしながら、「万歳、龍征服者」と、叫んでいたのを。

男一 はい、私は泣きました。でもあれは嘘泣きじゃないんです、ランスロット様。

ランスロット まさか知らない訳はないだろう。あいつが龍を殺したんじゃないって事ぐらい。

男一 家の中ではよく知っています。でもパレードに出たとなると・・・(肩を窄める。)

ランスロット 植木屋！

(植木屋、机の下から立ち上がる。)

ランスロット お前は金魚草に「大統領、万歳」と、叫ぶのを教えたな。

植木屋 はい。

ランスロット で、覚えたのか。

植木屋 はい、ただそれを言う度に、舌を出しますので。その。新しい研究費が出たらそこを改良しようかと。

ランスロット フリードリヒセン！

(男二、机の下から這い出る。)

ランスロット お前の事を怒って町長はお前の一人息子を牢屋に入れたな。

男二 はい、あの子は喘息持ちなのに、あんな湿気が多い地下牢に入れられて！

ランスロット その後、町長にパイプを贈呈したな。それも「何時までも、僕として」と、銘を打って。

男二 あいつの心を和らげる手立てが他に思い付かなくて。

ランスロット お前達をどうして呉れよう。

町長 唾でも吐きかけてやるんだな。この仕事はあんたには無理だ。わしとヘンリーがちゃんと治める。こんなろくでもない連中にはそれがまたいい見せしめだ。エルザを連れて、こんなところは出て行きなされ。ここはわしらの好きに任せとおくんじゃ。これこそがヒューマニズム、民主主義じゃ。

ランスロット それは出来ない。諸君、入って！

(織工一、二。鍛冶屋。帽子職人。楽器職人。登場。)

ランスロット お前達にも失望した。私がいなくてもお前達なら上手くやって呉れると思っていたのに。何故さつさと

諦めて牢屋になんか入ったんだ。味方がこんなに居るじゃないか。

織工一、二 あいつら、わしらに立ち直るすきを与えなかったんで……

ランスロット こいつらを引っ立てる。町長と大統領だ。

織工一、二 牢屋の格子は大丈夫。私が調べておいた。さあ、行け！

帽子屋 ほら、阿呆の印の帽子だよ。素敵な帽子も作ってあるけど、牢屋で随分、いじめられたからね。さあ行け！

楽器職人 私は独房でヴァイオリンを作りました。黒パンを台に、弦は蜘蛛の巣。音は小さいし、悲しい音しか出ないけど、ほら。こんなものしか出来ないのもあんたのせいだよ。さあ、この曲に合わせて牢屋行きだ。地獄の一丁目だ。

ヘンリー そんなのないよ。そんなの不公平。馬鹿げてる。さんしたやつこに、げすに、素人。こんなやつらに政治が出来るか。

織工一、二 行くんだ。

町長 わしは抗議する。ヒューマニズムに悖（もと）る事だ。

織工一、二 さあ行け。

（陰気な、単純な、やっと聞こえる音楽。ヘンリーと町長、退場。）

ランスロット エルザ、僕は一年前の僕とは違うんだ。分かるだろう？

エルザ ええ、今の貴方もっと素敵よ。

ランスロット 僕はこの町から出ては行かない。決して。

エルザ いいわ。家の中が、とても明るくなるから。

ランスロット 細々した仕事が待っている。刺繍より面倒だぞ。あの連中の一人一人に巣くっている籠を、退治しなければならぬんだ。

子供 それ痛い？

ランスロット 坊やは大丈夫。

男一 私達は？

ランスロット 暫くかかるな。

植木屋 辛抱強くやって下さい。ランスロット様、お願いです。諦めないで。まず種子を蒔いて、傍で焚き火。これは土を暖めて、育ちを早めるんです。次に草取り。大切な根を傷めないよう用心して。よく考えてみれば、たしかに人間だつて、細心の注意を払って育てられる価値があるかも知れませぬね。

エルザの友人一 やっぱり今日、結婚式をやりましょうよ。

エルザの友人二 だって、いいことがあると人ってよくなるものよ。

ランスロット そうだ。さあ、音楽！

（音楽、鳴る。）

ランスロット エルザ、手を。僕はここにいる皆さん全員が好きだ。そつでなければこんな面倒な騒動を引き起こしたりするものか。そして、愛さえあれば最後には総て良くなるんだ。僕達みんな幸せになるんだ。長い努力と苦しみはあつても。幸せになるんだ。必ず。

（幕）

昭和六十年（一九八五年）四月十八日 訳了

<http://www.aozora.gr.jp> 「龍兼」の項 又は

<http://www.01.246.ne.jp/tnoumi/noumi1/default.html>

Shvarts Plays The Trustees of the Shvarts Trust
ロシア著作権協会 (RAO) RUSSIAN AUTHORS' SOCIETY
(RAO)

6A, B, Bronnaya St., Moscow, 103870

日本における著作権管理代行者…

INTERNATIONAL PATENT TRADING CO. LTD

(IPTC)

21-22CHOME KIBA KOTO-KU TOKYO, JAPAN

135-0042 Tel: 03-3630-8537

これは、文法を重視した翻訳であり、上演用のもではありません。

上記芝居 (Dragon) の日本訳の上演は、必ず国際パテント
貿易株式会社（上記住所）へ申請して下さい。
